

平成 18 年度卒業論文

建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究

－建築一般誌と建築専門誌の作品写真から読み取れる両誌の特質分析－

指導教員

坂牛卓

信州大学工学部社会開発工学科

坂牛研究室

03T3080K 平岩宏樹

建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究 -建築一般誌と建築専門誌の作品写真から読み取れる両誌の特質分析-

坂牛研究室 03T3080K 平岩宏樹

1. 序

定期的に最新の建築作品を紹介している建築雑誌は建築意匠設計に大きな影響を与えているメディアのひとつといえる。そのような建築雑誌は大きく建築専門誌と建築一般誌の2つに分けることができる。建築専門誌では読者層の大半を占める専門家向けの深い考察が主眼となっている。また、建築一般誌においては広く一般の人を対象にし、建築の専門的な知識がなくても理解できるようにわかりやすく作られており、建築の分野にとどまらず社会と密接につながった議論の場を創造している。

90年代後半を境にそれまで建築雑誌の主流であった建築専門誌は相次いで休刊し、それに代わり新たに複数の建築一般誌が登場した¹⁾。建築一般誌は一般の人の需要にあった誌面作りを目指し、新たな読者層を開拓した。それに伴い、一般の人たちの建築に対する意識は専門誌主流の時期に比べて高くなりつつある。さらに、そのような一般の読者が建築一般誌から得た知識を持ちながら建築家に仕事を依頼する機会が増加しているため、建築家は建築意匠設計を行う上で建築一般誌の影響力を無視することはできなくなりつつある。

そこで本研究では建築一般誌と建築専門誌との比較を通じて、建築一般誌の情報伝達の特徴を理解し、建築意匠設計の構造の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 対象

建築雑誌は写真と文章から構成されるが、写真は文章では伝えることができないような視覚的な情報を伝えることができ、建築作品をわかりやすく説明するためにも写真による誌面の構成は必要不可欠である。そこで、本研究では建築専門誌・建築一般誌に登場する写真を分析対象にする。

さらに、建築一般誌としてマガジンハウス出版の『CasaBRUTUS』(以下、一般誌と表記)を選択する。それは、CasaBRUTUSが現在の建築ブームのさきがけになったといわれているからである²⁾。調査範囲は創刊(1998年 Winter)から69号(2005年12月)までとする。一方、建築専門誌として新建築社出版の『新建築』、『新建築住宅特集』(以下、専門誌と表記)を選択する。その理由は、現在発刊中の建築専門誌の中で最も古いためである。

そこで、両雑誌に掲載されている建築作品の写真を研究対象とし、その中で一般誌・専門誌ともに掲載され、かつ両雑誌ともにひとつの建築作品について6枚³⁾以上の写真で紹介、構成されているものを調査対象とした。

3. 分析・考察

対象となる写真は一般誌で582枚、専門誌で558枚あり、これらを以下の順に沿って分類する。

- それぞれの撮影時期に着目し竣工前・竣工後に二分する
- その中でさらに細分化し、主たる対象⁴⁾に着目し27分類する
- 撮影角度に着目し 度で分類した各項目の写真を3分類する
- 人の有無に着目し 度で分類した各項目の写真において有人写真の数をカウントする

その結果を表1にまとめる。

表1 分類項目及び主たる対象による分類

分類項目	一般誌						専門誌							
	主たる対象分類		角度について				有人の 写真	主たる対象分類		角度について				有人の 写真
	対象 数	割合 (%)	撮って いる	撮って いない	その 他	対象 数		割合 (%)	撮って いる	撮って いない	その 他			
建築空間	内部	室(全体)	110	18.9	59	51	0	23	138	24.7	49	89	0	23
		室(部分)	20	3.4	12	8	0	0	24	4.3	9	15	0	7
		通路(全体)	13	2.2	2	11	0	2	20	3.6	2	18	0	3
		通路(部分)	0	0	0	0	0	0	6	1.1	2	4	0	0
		全体	34	5.8	19	14	1	4	52	9.3	29	20	3	8
	外部	一部	63	10.8	36	15	12	13	75	13.4	41	33	1	24
		部分	17	2.9	12	4	1	2	8	1.4	3	4	1	1
		床	2	0.3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壁	17	2.9	12	5	0	1	4	0.7	3	1	0	0
		天井	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
建築物 竣工後	部位 (建築的 要素)	柱	2	0.3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		窓(開口部)	7	1.2	4	3	0	0	8	1.4	5	3	0	1
		扉	2	0.3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
		トップライト	8	1.4	7	1	0	3	6	1.1	4	2	0	1
		照明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		階段	10	1.7	7	3	0	1	1	0.2	0	1	0	0
		構造	0	0	0	0	0	0	8	1.4	4	4	0	2
		ファサード	18	3.1	7	11	0	5	19	3.4	6	13	0	2
		屋根	2	0.3	1	0	1	0	4	0.7	4	0	0	0
		ディテール	9	1.5	4	3	2	0	46	8.2	16	30	0	0
建築物 以外の 要素	人	43	7.4	20	11	12	43	6	1.1	1	3	2	6	
	建築家	43	7.4	7	8	28	43	5	0.9	1	0	4	5	
	家具・展示物	71	12.2	33	31	7	17	29	5.2	13	16	0	8	
	周辺環境	15	2.6	6	5	3	3	25	4.5	2	8	15	7	
	庭	25	4.3	9	11	5	8	29	5.2	10	14	5	9	
竣工前	工事写真など(施工段階)	13	2.2	1	0	12	3	25	4.5	10	2	12	9	
	設計手順(模型写真など)	38	6.5	11	4	24	8	20	3.6	9	4	8	3	
計		582	100	273	201	108	179	558	100	223	284	51	119	

3.1 主たる対象について

表1の中で、一般誌・専門誌を比較したとき、特徴的な差異が現れている部分を枠線で囲み、枠組を図1に、枠組について図2にグラフ化する。

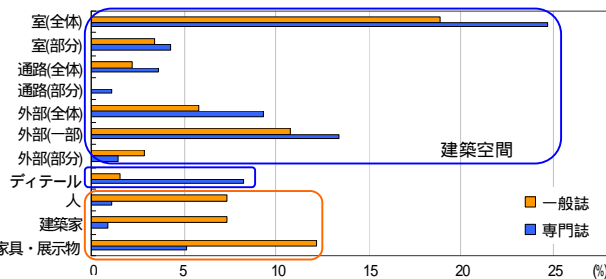


図1 主たる対象における比較(枠線)

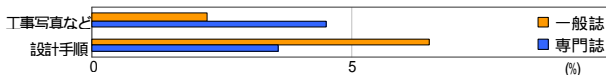


図2 竣工前後の比較(枠線)

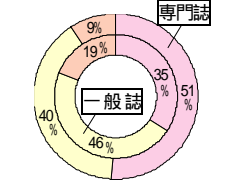
図1(枠線)より、専門誌においては建築空間・ディテールを撮影した写真の比率が高いことがわかる。一方、一般誌においては人、建築家、家具・展示物の項目が撮影されている比率が高い。これらのことから専門誌においては建築自体を、一般誌においては建物と人とのつながりを撮影する傾向があると考えられる。

また、図2(枠線)より、専門誌では一般誌に比べ、施工中の工事写真を多く扱っているのに対し、一般誌においては設計段階のプロセスを扱った写真が多く見られることが分かる。そこから専門誌は実体に即した建築成立過程を重要視しているのに対し、一般誌はその建物の設計過程・設計の概念などを重要視しているといえる。

3.2 角度について



振っていない⁵ 振っている⁶



振っていない 振っている
図3 全写真角度について

表1のより建築空間内部において、一般誌においては振って撮る傾向にあるのに対し、専門誌においては振らずに撮る傾向にあることが分かる。また、図3より全写真の中でみても一般誌は振って撮る傾向がみられ、専門誌は振らずに対象に正対して撮る傾向がみられる。

一般に人間は日常生活において耐えず運動し、視点が動いているため空間を正対せずに視覚的に認識する。そのため、人間の日常生活において正対して見ることはひとつの特異点と言える⁷。よって、

正対せずに振っていることは人間の視点に近い。つまり、一般誌の掲載写真は人々の視覚としてより自然で一般的な像を提示しているといえる。

3.3 人の有無について

表1のより、一般誌において有人写真が多い傾向を読み取ることができる。また3.1で示されたように人や建築家を主たる対象とする撮影頻度が高い傾向にあることが分かる。

写真における人の有無について考察するときにはロラン・バルトの「ストゥディウム」と「プンクトゥム」という概念は有効である⁸。ここでストゥディウムとは写真における一般的コードを指しプンクトゥムとは個別的な偶発的な衝撃のことである。建築写真における有人写真は、建築写真というコードの中にあらわれた一種の偶発性ともいうことができるため、そこに写り込む人の表情や行動がプンクトゥムの性質を持ちやすい。一方、専門誌の写真はその一般的性格からストゥディウムの性質が強いといえる。一般誌はそうしたプンクトゥムの効果によって専門誌に比べ、印象的で想像力をかきたてるものとなっているといえよう。

3.4 写真掲載順序について

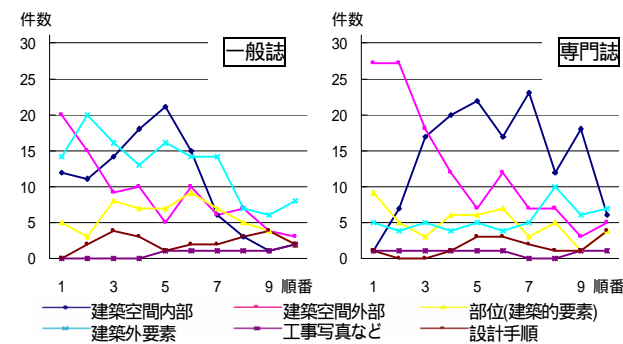


図4 写真掲載順序

図4は一般誌・専門誌それぞれにおいて写真の掲載順序に注目し、6つの項目における掲載順番ごとの作品件数をグラフ化したものである。

その結果より、一般誌と専門誌共に冒頭に外部を提示し、順次内部を掲載する傾向が見られるが、専門誌のほうがその傾向がより顕著に現れている。専門誌は建築を外部から内部へと順番に紹介し、空間構成を理解しやすいような順番での誌面構成を徹底しているといえる。一般誌は専門誌に比べると順序の決まりがはっきりしておらず、専門誌のような定式にとらわれない作品紹介が

されている。

3.5 写真のサイズについて

		枚数						各大きさ内の割合								
		内 部	外 部	部 位	建 築 外 要素	施 工 段 階	設 計 手 順	内 部	外 部	部 位	建 築 外 要素	施 工 段 階	設 計 手 順			
小写真	~3.1%	53	51	19	86	12	32	253	43.5	20.9	20.2	7.5	3.4	4.7	12.6	100
約1/16	3.1%~9.4%	40	22	31	32	0	4	129	22.2	31	17.1	24	24.8	0	3.1	100
約1/8	9.4%~18.8%	16	8	5	27	0	0	56	9.6	28.6	14.3	8.9	48.2	0	0	100
約1/4	18.8%~37.5%	5	7	8	10	1	1	32	5.5	15.6	21.9	25	31.3	3.1	3.1	100
約1/2	37.5%~75%	10	4	4	17	0	1	36	6.2	27.8	11.1	11.1	47.2	0	2.8	100
約1/1	75%~150%	14	19	10	21	0	0	64	11	21.9	29.7	15.6	32.8	0	0	100
約2/1	150%~	5	3	0	4	0	0	12	2.1	41.7	25	0	33.3	0	0	100
計		143	114	77	197	13	38	582	100	24.6	19.6	13.2	33.8	2.2	6.5	100
小写真	~3.1%	0	9	31	34	16	8	110	19.7	9.1	8.2	28.2	30.9	14.5	7.3	100
約1/16	3.1%~9.4%	41	12	11	7	3	4	66	11.8	39.4	18.2	16.7	10.6	4.5	6.1	100
約1/8	9.4%~18.8%	21	12	14	10	0	8	65	11.6	20	18.5	21.5	15.4	0	12.3	100
約1/4	18.8%~37.5%	25	17	4	11	3	0	60	10.9	33.3	28.3	6.7	18.3	5	0	100
約1/2	37.5%~75%	38	16	11	12	1	0	78	14	44.9	20.5	14.1	15.4	1.3	0	100
約1/1	75%~150%	35	37	17	10	1	0	100	17.9	30	37	17	10	1	0	100
約2/1	150%~	28	32	8	10	1	0	79	14.2	35.4	40.5	10.1	12.7	1.3	0	100
計		188	135	96	94	25	20	558	100	29	24.2	17.2	16.8	4.5	3.6	100

表2 撮影対象と写真サイズの関係

表2は一般誌・専門誌それぞれに掲載された写真のサイズについて注目し、誌面1ページの面積を基準として6つの項目における掲載写真のサイズの枚数・割合について表したものである。

その結果一般誌は撮影部分と写真サイズには明確な相関関係は見られず()それぞれの部分を均等に扱う傾向があるのに対し、専門誌においては写真が大きくなるにつれて全体像(内外問わず)を撮っている写真の割合が多くなり、逆にサイズが小さくなると部位や建築外要素などの割合が多くなるのがわかる。()

これらから、専門誌においては全体像を大きく、部位や建築外要素などの部分像を小さく撮影して扱っているといえ、いかにすると、専門誌においては掲載写真の扱われ方がある程度決まっているのに対し、一般誌では大きさについて定式化された扱われ方はなくさまざまな種類の写真を大きさの関係なしに扱っているといえる。

4. 結

以上、一般誌と専門誌の掲載写真を比較することによって、一般誌が提示する建築のイメージの一端を明らかにした。そこから、一般誌において 建築空間のみならず、空間以外の要素も重要視し撮影していること、建物と人とのつながりに注目していること、より人間の視覚に近い自然な視点で撮られていること、プンクトゥムの性質を持つ写真が多いこと、様々な視点から建築像を自由な編集方針で扱っていることが分かった。すなわち、一般誌は人の視線を重視し、定式にとらわれない多様なイメージを提供しているのに対し、専門誌は記録的性格が強く、主として建築空間を提示しているといえる。

上記結果は一般誌隆盛の事実を考え合わせた時、現代建築を取り巻く情報環境の変容と考え得るものである。

注)

*1 建築専門誌のSD、建築文化、都市住宅が休刊となったのに対し95年以降建築一般誌は8冊刊行された *2 http://www.toto.co.jp/gallery/100times/rept_b2/htm「ギャラリー一問100回展『この先の建築』シンポジウム』より、2006年10月22日取得 *3 一般誌は5枚以下で作品紹介される場合が多いが、専門誌との比較において体系的に判断するため、6枚以上の写真を対象とした *4 主たる対象として写真において最も注目されている部分であり、その写真の構成やキャプションなどを考慮して決定した *5 新建築 2004年11月号 p.73 金沢21世紀美術館 *6 CasaBRUTUS No.62 p.67 金沢21世紀美術館 *7 パノフスキーはルネサンス期に登場した中心遠近法を本来の人間の視覚からは外れたものであるとした。エルヴィン・パノフスキー、(2003) 象徴形式としての遠近法、(木田元 訳)、哲学書房 *7 バルトは「ストゥディウム」とは一般関心を想起させるもので表面的な意味しか伝えないものとし、「プンクトゥム」はストゥディウムを破壊し、その写真の要素に注目させ、偶然写真に登場するものであり、その裏に別の物語を想像することができるものとした。ロラン・バルト、(1985) 明るい闇 写真についての覚書、(花輪光 訳)、みすず書房。

■目次

1 序

1.1 研究の背景	5
1.2 研究の目的と意義	6
1.3 研究対象	6
1.4 CasaBRUTUS の歴史と特質	8
1.5 新建築の歴史と特質	9
1.6 既往研究	9

2 建築写真について

2.1 写真の登場	14
2.2 建築ジャーナリズムの登場	14
2.3 建築ジャーナリズムと建築写真	15
2.4 建築写真の特徴	16

3 分析・考察

3.1 概要	20
3.2 主たる対象について	20
3.2.1 分析方法	
3.2.2 結果	
3.2.3 考察	
3.3 角度による考察	23
3.3.1 分析方法	
3.3.2 結果	
3.3.3 考察	
3.4 人の有無について	27
3.4.1 分析方法	
3.4.2 結果	
3.4.3 ロラン・バルトの写真論	
3.4.4 考察	

3.5 写真掲載順序について.....	3 2
3.5.1 分析方法	
3.5.2 結果	
3.5.3 考察	
3.6 写真サイズについて.....	3 3
3.6.1 分析方法	
3.6.2 結果	
3.6.3 考察	
4 結	3 7
<hr/>	
参考文献	4 1
謝辞	4 4

データシート

序章

- 1.1 研究の背景
- 1.2 研究の目的と意義
- 1.3 研究対象
- 1.4 CasaBRUTUS の歴史と特質
- 1.5 新建築の歴史と特質
- 1.6 既往研究

1.1 研究の背景

近年、様々な雑誌において建築の特集が組まれている。また、テレビ番組などでも建築をテーマに編集された番組が増えてきている。このような状況の中で、一般の人が新しい建築の情報に触れる機会は以前に比べると多くなった。そのような建築のメディアへの露出によって、一般の人も含めた社会全般において建築のイメージも変化してきている。その中で、定期的に最新の建築作品を紹介している建築雑誌は建築意匠設計に大きな影響を与えているメディアのひとつといえる。そういった建築雑誌は大きく建築専門誌と建築一般誌の2つに分けることができる。建築専門誌では読者層の大半を占める専門家向けの深い考察が主眼となっている。また、建築一般誌においては広く一般の人を対象にし、建築の専門的な知識がなくても理解できるようにわかりやすく作られており、建築の分野にとどまらず社会と密接につながった議論の場を創造している。

現在その建築雑誌の世界に大きな変化が起こっている。1990年代後半までは『新建築』をはじめとし『GA JAPAN』、『建築文化』、『SD』、『都市住宅』などの建築専門誌が中心であった。そこでは専門家と建築専門誌の立場は密接し、建築に直接関係しない一般の人への影響力は少なかった。しかし、建築にかかわる雑誌の中で主流であった建築専門誌も、『建築文化』、『SD』、『都市住宅』などが読者層を減少させ相次いで休刊となり全体として縮小の傾向にある。それに代わり1990年後半から新たに複数の建築一般誌が登場した¹。その要因として挙げられるのは一般読者の需要にあった誌面作りである。それによってそれまで建築雑誌を手取ることのなかった一般の人を読者に取り込むことに成功した。

それに伴い一般の人たちの建築に対する意識は専門誌主流の時期に比べて高くなりつつある。そうした一般の人は建築の使用者であり、潜在的な施主ともいうことができる。そのような人々が多くなっていくことによって、建築を使用する側の視点も変わってきているといえる。そのような使用者から見た視点の変化を建築家は無視できない。さらに、そうした一般の読者が建築一般誌から得た知識を持ちながら建築家に仕事を依頼する場合が増加している。建築意匠設計は施主の意見が多く反映されるため、建築家は建築意匠設計を行う上で建築一般誌の影響力を無視することはできなくなっている。

1.2 研究の目的と意義

そこで本研究では建築一般誌と建築専門誌との比較を通じて、建築一般誌の情報伝達の特徴を明確にすることを目的とし、それによって建築意匠設計の構造の一端を明らかにすることに意義がある。

1.3 研究対象

建築雑誌は写真と文章から構成されるが、雑誌を読むとき第一印象として記憶に残るのは写真による視覚的な映像であり、建築作品をわかりやすく説明するためにも写真による構成は必要不可欠である。そのため、本研究では建築専門誌・建築一般誌に登場する写真を分析対象にする。

本研究では建築一般誌としてマガジンハウス出版の『CasaBRUTUS』（以下、一般誌と表記）を選択する。それは、CasaBRUTUS が現在の建築ブームのさきがけになったといわれているからである²。調査範囲は創刊（1998年 Winter号）から69号（2005年12月号）までとする。一方、建築専門誌の代表として新建築社出版の『新建築』、『新建築住宅特集』（以下、専門誌と表記）を選択する。それは、現在発刊中の建築専門誌の中で最も古いためである。

そこで、両雑誌に掲載されている建築作品の写真を研究対象とし、その中で一般誌・専門誌ともに掲載され、かつ両雑誌ともにひとつの建築作品について6枚以上³の写真で作品紹介が構成されているものを調査対象とした。

その結果、44件の建築を対象として抜き出た（一般誌については5件の建築が複数号にわたって解説されていたので述べ51件となっている）。その中に掲載されている対象写真数は一般誌582枚、専門誌558枚となった。以下の表1.1、表1.2に一般誌・専門誌それぞれについて対象建築と掲載枚数を示す。

表 1.1 一般誌対象建築物

番号	設計者	建物名	建物用途	竣工年		掲載号			掲載枚数
				年	月	vol.	年	月	
1	安藤忠雄	淡路夢舞台	複合施設	1999	12	6	2000	spring	8
2	谷口吉生	東京国立博物館法隆寺宝物館	博物館	1999	3	7	2000	summer	7
3	谷内田章夫	ALTO B	集合住宅	1997	3	8	2000	11	6
4	伊東豊雄	せんだいメディアテーク	情報文化施設	2000	8	12	2001	3	6
5	荒川修作	養老天命反転地	公園	1995	10	12	2001	3	12
6	安藤忠雄	アルマーニ/テアトロ	劇場	2001	7	19	2001	10	8
7	安藤忠雄	国際子ども図書館	図書館	2002	1	20	2001	11	6
8	伊東豊雄	東雲キャナルコートCODAN2街区	集合住宅	2003	7	29	2002	8	11
9	安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	2002	9	30	2002	9	30
10	安藤忠雄	ピュリッツァー美術館	美術館	2001	7	30	2002	9	6
11	安藤忠雄	淡路夢舞台	複合施設	1999	12	30	2002	9	11
12	安藤忠雄	国際子ども図書館	図書館	2002	1	30	2002	9	13
13	安藤忠雄	直島コンテンポラリーアートミュージアム+アネックス	複合施設	1995	6	30	2002	9	12
14	安藤忠雄	大阪府立近つ飛鳥博物館	博物館	1994	3	30	2002	9	10
15	安藤忠雄	大阪府立狭山池博物館	博物館	2001	3	30	2002	9	10
16	川久保玲+河崎隆雄	コムデギャルソン京都店	物販販売	2002	7	32	2002	11	7
17	安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	2002	9	36	2003	3	9
18	伊東豊雄	せんだいメディアテーク	情報文化施設	2000	8	40	2003	7	7
19	安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	2002	9	42	2003	9	40
20	安藤忠雄	野間自由幼稚園	教育施設	2003	1	42	2003	9	10
21	安藤忠雄	4m×4mの家	住宅	2003	3	42	2003	9	6
22	青木淳	ルイ・ヴィトン六本木ヒルズ店	物販販売	2003	8	44	2003	11	17
23	三分一博志	北向傾斜住宅	住宅	2003	8	48	2004	3	6
24	眞田大輔+名和研二	SHS	住宅	2003	10	48	2004	3	6
25	手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	屋根の家	住宅	2001	3	48	2004	3	6
26	小嶋一浩+曲淵英邦	スペースブロック ハノイモデル	集合住宅	2003	6	48	2004	3	8
27	坂倉・清田・構造計画設計共同体	ラ・ヴェール明石町	集合住宅	2004	6	49	2004	4	7
28	安藤忠雄	地中美術館	美術館	2004	6	55	2004	10	33
29	安藤忠雄	Invisible House	住宅	2004	5	55	2004	10	7
30	SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	2004	9	55	2004	10	7
31	青木淳	ルイ・ヴィトン銀座並木通り店	物販販売	2004	8	56	2004	11	20
32	谷口吉生	ニューヨーク近代美術館	美術館	2004	11	58	2005	1	69
33	青木淳	G	住宅	2004	7	59	2005	2	6
34	阪根宏彦	九段の家	住宅	2003	12	59	2005	2	6
35	手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	展望台の家	住宅	2004	7	59	2005	2	8
36	フランク・ラ・ヴィエレ+山代悟	Y-house	集合住宅	2004	12	59	2005	2	7
37	山本理顕	エコムスハウス	住宅	2004	3	59	2005	2	8
38	伊東豊雄	アルミコテージ	別荘	2004	8	59	2005	2	7
39	難波和彦	箱の家-83	住宅	2004	1	59	2005	2	7
40	千葉学	MESH	集合住宅	2004	4	59	2005	2	6
41	杉千春+高橋真奈美	Barenhaus	集合住宅	2004	3	59	2005	2	7
42	木下道郎	barres	集合住宅	2004	3	59	2005	2	6
43	坂茂	ピアノマレ・ノマディック・ミュージアム	美術館	2005	2	62	2005	5	6
44	SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	2004	9	62	2005	5	13
45	ヨコシマコト	富弘美術館	美術館	2005	4	62	2005	5	20
46	安藤忠雄	hhstyle.com/casa	物販販売	2005	2	63	2005	6	13
47	横総合計画事務所	国立国語研究所	研究施設	2004	10	63	2005	6	6
48	法政・早稲田・横浜国立・日本女子大学ワークショップ	月影の郷(リノベーション)	宿泊施設	2005	3	65	2005	8	8
49	竹中工務店	竹中工務店東京本社	オフィスビル	2004	9	67	2005	10	10
50	イサム・ノグチ	モエレ沼公園	公園			67	2005	10	11
51	SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	2004	9	69	2005	12	6

表 1.2 専門誌対象建築物

番号	設計者	建物名	建物用途	竣工年		掲載雑誌	掲載号	掲載枚数	
				年	月				
1	安藤忠雄	大阪府立近つ飛鳥博物館	博物館	1994	3	新建築	1994	9	17
2	荒川修作	養老天命反転地	公園	1995	10	新建築	1995	11	10
3	安藤忠雄	直島コンテンポラリーアートミュージアム+アクセス	複合施設	1995	6	新建築	1996	7	7
4	イサム・ノグチ	モエレ沼公園	公園			新建築	1996	12	13
5	谷内田章夫	ALTO B	集合住宅	1997	3	新建築	1997	6	8
6	安藤忠雄	淡路夢舞台	複合施設	1999	12	新建築	2000	7	29
7	伊東豊雄	せんだいメディアテーク	情報文化施設	2000	8	新建築	2001	3	39
8	谷口吉生	東京国立博物館法隆寺宝物館	博物館	1999	3	新建築	2001	5	18
9	手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	屋根の家	住宅	2001	3	住宅特集	2001	8	7
10	安藤忠雄	大阪府立狭山池博物館	博物館	2001	3	新建築	2001	11	13
11	安藤忠雄	アルマーニ/テアトロ	劇場	2001	7	新建築	2001	12	12
12	安藤忠雄	ピュリッツァー美術館	美術館	2001	7	新建築	2002	3	13
13	安藤忠雄	国際子ども図書館	図書館	2002	1	新建築	2002	7	9
14	川久保玲+河崎隆雄	コムデギャルソン京都店	物販販売	2002	7	新建築	2002	9	8
15	安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	2002	9	新建築	2003	5	10
16	安藤忠雄	4m×4mの家	住宅	2003	3	住宅特集	2003	6	10
17	伊東豊雄	東雲キャナルコートCODAN2街区	集合住宅	2003	7	新建築	2003	9	14
18	小嶋一浩+曲淵英邦	スペースブロック ハノイモデル	集合住宅	2003	6	新建築	2003	9	25
19	青木淳	ルイ・ヴィトン六本木ヒルズ店	物販販売	2003	8	新建築	2003	10	15
20	三分一博志	北向傾斜住宅	住宅	2003	8	住宅特集	2003	11	9
21	眞田大輔+名和研二	SHS	住宅	2003	10	住宅特集	2004	3	13
22	難波和彦	箱の家-83	住宅	2004	1	住宅特集	2004	5	7
23	千葉学	MESH	集合住宅	2004	4	新建築	2004	6	6
24	安藤忠雄	野間自由幼稚園	教育施設	2003	1	新建築	2004	7	10
25	坂倉・清田・構造計画設計共同体	ラ・ヴェール明石町	集合住宅	2004	6	新建築	2004	8	6
26	阪根宏彦	九段の家	住宅	2003	12	住宅特集	2004	8	11
27	安藤忠雄	地中美術館	美術館	2004	6	新建築	2004	9	15
28	青木淳	G	住宅	2004	7	新建築	2004	9	8
29	山本理顕	エコムスハウス	住宅	2004	3	新建築	2004	9	6
30	青木淳	ルイ・ヴィトン銀座並木通り店	物販販売	2004	8	新建築	2004	10	10
31	SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	2004	9	新建築	2004	11	12
32	伊東豊雄	アルミコテージ	別荘	2004	8	新建築	2004	12	20
33	竹中工務店	竹中工務店東京本社	オフィスビル	2004	9	新建築	2004	12	9
34	手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	展望台の家	住宅	2004	7	住宅特集	2005	1	7
35	横総合計画事務所	国立国語研究所	研究施設	2004	10	新建築	2005	1	13
36	フランク・ラ・ヴィエレ+山代悟	Y-house	集合住宅	2004	12	新建築	2005	2	10
37	杉千春+高橋真奈美	Barenhaus	集合住宅	2004	3	新建築	2005	2	8
38	安藤忠雄	Invisible House	住宅	2004	5	新建築	2005	3	8
39	坂茂	ピアノマレ・ノマディック・ミュージアム	美術館	2005	2	新建築	2005	4	7
40	ヨコシノマコト	富弘美術館	美術館	2005	4	新建築	2005	4	35
41	安藤忠雄	hhstyle.com/casa	物販販売	2005	2	新建築	2005	7	6
42	木下道郎	白金集合住宅[barres]	集合住宅	2004	3	新建築	2005	8	10
43	谷口吉生	ニューヨーク近代美術館	美術館	2004	11	新建築	2005	9	21
44	法政・早稲田・横浜国立・日本女子大学ワークショップ	月影の郷(リノベーション)	宿泊施設	2005	3	新建築	2005	9	14

1.4 CasaBRUTUS の歴史と特質

CasaBRUTUSはマガジンハウス出版の雑誌で同社の雑誌BRUTUSの別冊として1998年Winter号から創刊した。1998年winter号から2000年summer号まで、年4回発刊の季刊誌として7巻発刊された。そして、2000年11月号から月刊誌となり現在まで83巻(2007年2月号まで)の発行をしている。また、同誌は建築・住宅・インテリアを積極的にカバーした一般

誌の代表格とされ、発行部数が約7万部⁴と専門誌をはるかにしのぐ。定期購読者1万人強の内訳を見ると、建築関連が約3割、デザイン関連が約2割を占める。⁵

また、マガジンハウス編集長である吉家千絵子は、CasaBRUTUSは建築情報を主体とする一般誌であるとし、同誌の編集方針を第一に、徹底的に「カッコいい」こと、第二に「徹底して情報収集を行うこと」とした。また、誌面では、収集した大量の情報を、まったく知らない立場から質問するように、鋭く切り込んでいる。さらに同誌は「わかりやすい表現」を信条とし、「作品を判断しない」と明言することで、自由な表現を獲得した。⁶

その読者層は会社員・公務員29%、学生20%、専門職・自由業19%、専業主婦15%、会社役員・管理職8%、無職・その他6%という内訳である。

1.5 新建築・新建築住宅特集の歴史と特質

新建築は新建築社出版の建築専門誌で1925年に創刊され、現在発刊中の建築専門誌では最も早くに創刊された雑誌である。創刊当初は「住」に関する諸問題を扱っていかこうとするものであった。その後、その範囲を広げていき、多くの企画が誌面を飾るようになる。その後、第二次世界大戦のあおりを受けて1945年に休刊し、翌年の1946年に復刊される。1953年に川添登が編集長になってからは建築の批評などの建築ジャーナリズムの確立に向かって誌面作りを進めた。しかし、1957年に川添が新建築を去ったことにより、編集方針が変わり、「記録に徹する」という体制を維持し、現在に至る⁷。また、1985年には新建築の姉妹誌として、季刊の新建築住宅特集が創刊され、1986年5月に月刊誌となり、現在は表題に“jt”を加え、住宅建築の専門誌として扱われている⁸。

また、新建築社代表取締役社長（当時）の吉田義男は新建築誌の理念を「建築専門雑誌の編集者は、常に建築という分野における学問、作品、芸術などの意義、価値を見出し、取材、編集、印刷、出版という創作を通じて記録にとどめることにある⁹」として、その記録性を強調した。

1.6 既往研究

建築写真を扱った研究としては、建築雑誌の掲載写真に関する研究、建築家の作品集における写真の表現に関する研究に二分することができる。

建築雑誌の掲載写真に関する研究としては、建築誌及び住宅誌に掲載された住宅作品のス

チール写真を取り上げ両誌の比較からその差異を抽出することにより建築のイメージ形成にかかわる枠組みの一端を明らかにすることを目的としているもの¹⁰、建築誌上の住宅写真に注目し、年代別にこれらを比較検討することにより、写真を通して住宅のあり方を明らかにしようとするもの¹¹、建築雑誌に掲載された住宅作品の建築写真の分析をすることによって、建築写真の表現と、写真と建築の関係性を把握することを目的とするもの¹²、現代住宅作品の主空間の写真を資料とし建築写真に表現された室内構成を資料とし建築写真に表現された室内構成を分析することで建築空間のイメージを形成する枠組みの一端を明らかにすることを目的とするもの¹³などがある。

また、建築家の作品集における写真表現について扱ったものとして、ル・コルビュジェの作品集における写真を取り上げ、発表写真の内容とその組み合わせや大きさの相対的な関係による写真の構成を検討することから、ル・コルビュジェによって建築作品がどのように集中的に表現されているかを明らかにしたもの¹⁴、そのシーケンスに注目することで情報としての建築の構成を明らかにしているもの¹⁵、ル・コルビュジェの建築空間を異なる表現手法のコレクション的構成として捉え分析しているもの¹⁶、写真ごとに写された建築空間あるいは部位・要素といった写真の対象物を整理し、写真間での対象の共通性からその関係を写真の大きさをもとに検討したもの¹⁷などがある。

この中で、建築一般誌と建築専門誌に掲載される写真の差異に注目し、考察を行っているものとして「建築誌・住宅誌での写真における住宅 —建築のイメージ形成にかかわる枠組みの研究」（坂本一成・奥山信一、1986）が挙げられる。そこで、以下で上記研究の概要をまとめ、本研究との違いを明確にする。

「建築誌・住宅誌での写真における住宅 —建築のイメージ形成にかかわる枠組みの研究」
（坂本一成・奥山信一、1986）

建築誌及び住宅誌に掲載された住宅作品のスチール写真を取り上げ、両誌の比較からその差異を抽出することにより、建築のイメージ形成にかかわる枠組みの一端を明らかにすることを試みている。

研究対象として建築誌及び住宅誌の代表的と思われる各々一誌ずつ（建築誌として新建築、住宅誌としてニューハウスを採用）に掲載された住宅作品全体の掲載写真をサンプルA、広く建築・住宅両誌（専門誌として新建築・建築文化、住宅誌としてモダンリビング・住まいと設計・フェリカ・ニューハウスを採用）に同じ作品が掲載されたものの掲載写真をサンプ

ルBとして取り出している。

分析方法として、サンプルA及びサンプルBをそれぞれ表 1. 1 のカテゴリーに従って分類し、各項目の枚数頻度と組み合わせの比率から考察を行っている。

結論として、[外部]の位置づけが建築誌においてより強いことが挙げられている。また、内部においては、住宅誌が共用的・個人的領域(領域 b・a)を主とし、すべての領域において網羅的に部屋の全体像を表しているのに対し、建築

誌では共用的・中間的領域(領域 b・d)が軸となり、室を断片的に対象化している。また外部において、住宅誌が建物の外観を曖昧な全体像として捉えているのに対して、建築誌では、多くの部分を捉えることにより、外観を断片化しているものの、全体を表す際には対象物のみを即物的に捉える対象性、及び建物周辺との関係を問題にする環境性という二つの側面を持つことが明らかになったと結んでいる。

この研究では住宅という限られた場での比較を対象として取り組んでおり、本研究のように広く、さまざまな建築を対象としていない。今日の建築一般誌の隆盛によって住宅だけではなく、美術館や物販施設など一般誌の取り上げる物件は広範にわたり、住宅だけで論じることはできなくなっている。そのため、住宅以外に対象を広げ研究することに意義はあると思われる。また、本研究においては写真の掲載順序やサイズにも注目し、より多様な視点での考察を試みる。

表 1. 1 カテゴリー表

外部		
性格	領域A	敷地内で写されている非環境的なもの
	領域B1	敷地外から対象物のみ写されているもの
	領域B2	敷地外から周辺環境も写されているもの
角度	振っている	主要対象面に対して振っているもの
	振っていない	主要対象面に対して振っていないもの
ヴォリューム	全体	対象物全体が写されているもの
	一部	<全体>でも<部分>でもないもの
	部分	特定の部位が写されているもの
内部		
性格	領域a	寝室・子供室などの個人的なもの
	領域b	居間・食堂・DKなど共用的なもの
	領域c	台所・浴室・トイレなど生活的なもの
	領域d	玄関ホール・廊下・階段室など中間領域的なもの
	領域e	客間としての和室
	領域f	納戸・予備室・アトリエなど
角度	振っている	主要対象面に対して振っているもの
	振っていない	主要対象面に対して振っていないもの
ヴォリューム	室	<部分以外のもの>
	部分	特定の部位・部分が写されているもの

- 1 建築専門誌のSD、建築文化、都市住宅が休刊となったのに対し、95年以降建築一般誌は8冊刊行された。
- 2 榎TOTO、ギャラリー間ホームページ「ギャラリー間100回展『この先の建築』シンポジウム」、http://www.toto.co.jp/gallama/100times/rept_b2/htm、2006年10月22日取得
- 3 一般誌についてはほとんどの作品が掲載写真5枚以下で解説されているが、本研究では写真による誌面構成を体系的に判断するため、6枚以上の写真で紹介されているものとした。
- 4 社団法人 日本雑誌協会発表による2005年9月1日から2006年8月31日の1年間に発売された1

号あたりの平均印刷部数は 68,583 部であった

- 5 細野透. (2007). 『建築雑誌』の幸運と不運. 日本建築学会. 建築雑誌, 2007 年 1 月号: 38
- 6 注 2 参照 ギャラリー間 100 回展『この先の建築』シンポジウムでの「なんとって建築家!」の特集より
- 7 新宮岳、「都市住宅に関する研究」、2004
- 8 吉田義男. (1995). 刊行のことば. 新建築社. 新建築 1995 年 12 月臨時増刊創刊 70 周年記念号 現代建築の軌跡: 2
- 9 注 8 参照
- 10 坂本一成・奥山信一、「建築誌・住宅誌での写真における住宅 — 建築のイメージにかかわる枠組みの研究 —」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道)』、1986
- 11 坂本一成・西沢大良・高橋寛: 「建築誌写真に表現される住宅 — 「建築としての住宅」のありかたに関する研究 —」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿)』、1987
- 12 新谷美和・貝島桃代: 「建築雑誌に見る現代日本住宅における写真表現 — 写真と建築の関係 —」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸)』、2002
- 13 奥山信一・桜井春美・塩崎太伸、「建築写真に表現された室内構成 — 建築空間のイメージ形成にかかわる枠組の研究 —」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海)』、2003
- 14 神原栄男・坂本一成・足立真・塚本由晴・小川次郎・寺内美紀子・三村大介、「ル・コルビュジェ作品の発表写真における建築表現 — 『全作品集』にみられる写真の対象と構成 —」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)』、1997
- 15 岡河貢・足立真・坂本一成、「情報化された建築空間の構成に関する研究 — ル・コルビュジェ全作品集の建築写真の連続性について —」、日本建築学会計画系論文集、第 564 号、2003
- 16 岡河貢・足立真・坂本一成、「ル・コルビュジェ全作品集における建築写真と図面・スケッチの構成 — 情報化された建築空間の構成に関する研究 —」、日本建築学会計画系論文集、第 607 号、2006
- 17 岡河貢・足立真・坂本一成、「ル・コルビュジェ全作品集における建築写真の対象と構成 — 情報化された建築空間の構成に関する研究 —」、日本建築学会計画系論文集、第 609 号、2006

2 章

建築写真について

- 2.1 写真の登場
- 2.2 建築ジャーナリズムの登場
- 2.3 建築ジャーナリズムと建築写真
- 2.4 建築写真の特徴

2.1 写真の登場

写真の撮影装置であるカメラの原型は、カメラ・オブスキュラの原理による物で、その現象そのものは紀元前から知られており、絵画制作に用いられてきた。また、18世紀から19世紀初頭における西洋社会では、物理学（光学）や化学がカメラ・オブスキュラの映像を「物」に定着させる試

みがなされていた。そのように、カメラ・オブスキュラの技術と、物理学（光学）や化学が結びついたところに現在の写真の原型が出来上がった。¹

最初期の感光剤の性能では、数時間の露出時間を必要としたため、雲や人などの動くものを撮影することは難しかったため、最初の被写体として建築が多く写っている。事実、1826年に撮影された最古の写真とされるJ.N. ニエプスによる「家の窓の眺め」には窓の外

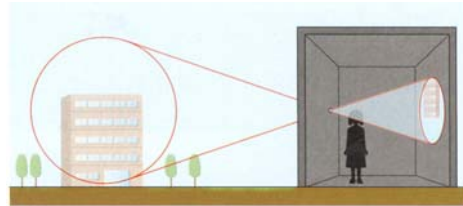


図 2.1.1 カメラ・オブスキュラの原理
(日経アーキテクチャ 2006年12月11日号 p.15)

の建物の姿が見える²。この状態は、湿式コロディオン法の普及によって、撮影時間が秒単位まで短縮される1851年以降まで続いた。そのため、初期の写真には必然的に建物を撮影した写真が多かったといえる³。



図 2.1.1 家の窓の眺め(J.N. ニエプス, 1826)
(写真の歴史 p.21)

2.2 建築ジャーナリズムの登場

建築に関する最初の書物はウィトルウィウスの建築書までさかのぼることができる⁴。この本はオリジナルを喪失しながらも写本という形で生き延びたが、当時印刷技術は発達していなかったため、同一内容を広く広めることはできなかった。その後16世紀になると銅版画が発明され建築を解説する複製品としての図版が出回るようになった。その後、カメラ・オブスキュラの利用による精密な透視図法や銅版画の作成技法が高度に複雑化したことで、それらの図版は芸術的な一分野となった。さらに、ピラネージやプレー、ルドゥーなどの登場によって建築のデザインは、建築家から工事者に伝わりそれが施工された後に一般に伝わるという道筋ではなく、着想されて間もなく着工される前に絵として人々に伝わるようになったため、それを前提として建築はデザインされるようになった⁵。

18 世紀末には建築関係の書物は理論書から実用書までヨーロッパ各地で数多く出版されるようになった。しかし、建築の定期刊行物（いわゆる建築雑誌）は、1830 年代になるまで出ておらず、初期の物としてロンドンの『Architectural Magazine』（1834 年創刊）やウィーンの『Allgemeine Bauzeitung』（1836 年創刊）⁶などが現れた。フランス政府によってダゲレオタイプが公式に発表されたのが 1839 年であり、それが写真の公式な発明とされていることから⁷、写真と建築雑誌はほぼ同じ時期に発明されたといっていだろう。

2.3 建築ジャーナリズムと建築写真

ほぼ時を同じくして生まれたはずの建築雑誌と写真であったが、初期の建築雑誌には写真は掲載されていない。写真が建築雑誌に載ることによるイメージの普及には、印刷技術と紙媒体と販売経路の 3 つのメディアを必要であるが、当時はそれらが未発達であったためスケッチの多くは線画で表現されていた。福屋粧子は初期の建築雑誌における写真掲載の発展は次の 4 段階に区分できるという。

1. 1830 年代から 1860 年代にかけての写真の掲載を意図しない時期。
2. 1860 年代から 1880 年代前半の写真を掲載したいが印刷技術に限界があり、不可能であった時期。
3. 1880 年代後半から 1890 年までの写真が特別なものとして差込で製本された時期。
4. 1891 年から 1920 年代以降にかけての写真が本文中に文字と並列してレイアウトされるようになった時期。

また、その後の転換点としては 1970 年のカラー印刷の普及による変化が挙げられる。現在の建築雑誌の原型となり、建築デザインの流れを変える主要な存在としての建築ジャーナリズムは、写真が印刷物として大量に出回り始めた 1891 年から 1920 年代にほぼ完成したといえるだろう⁸。

さらに、福屋粧子は現在の建築ジャーナリズムと建築写真について

建築写真とは建築ジャーナリズムの均質な空間を形づくるフレームであったとも言えるだろう。写真は、最後に付け加えられた建築表現としてのメディアではなく、近代建築がスタイルとして成立するための「空間」を提供していたのである。（福屋粧子 1999 47）

といい、五十嵐太郎も

建築の雑誌は、文章に加えて、図版や写真を用い、情報を二重に伝達する。しかも、雑誌がインターナショナルに通用するようになれば、読者の使用言語に関係なく、瞬時に情報を伝える写真の影響力は無視できない。絵入りで新しい建築を紹介する習慣は 1860 年代に入ってから定着するようだがむしろ圧倒的な視覚の情報に文字の情報が付随するという逆転は、今世紀の雑誌において顕著になったのではないか。いまや多くの建築雑誌は美しい写真を中心にして構成される。(五十嵐太郎 1999 35)

と言及し、建築ジャーナリズムにおける写真の占める重要性について語っている。現在では、建築雑誌において文章に比べ、写真の優位性が確認できる。そのため、建築雑誌に写真がどのように登場するか考察することはその特質を知る上で重要な要素のひとつといえることができる。

2.4 建築写真の特徴

現在の建築写真の大きな特徴となっているのが、垂直性の維持と無人性だ。その原型が形づくられたのは、1830 年代から 1880 年までの、写真という存在が建築ジャーナリズムからはまだ遠かった時期である。また、写真家の大辻清司は次のように述べている。

初期の建築写真では、このようにほかの記録写真と同じく、素朴だが厳密で正確な現実再現の記録手段、という観点からのアプローチで撮られていたのに間違いはないのだが、ただ二つの点で現代の建築写真にも受け継がれている、一種の様式といってもいい特徴がみられる。その一つはタブーのように守られている垂直線の維持である。建物の垂直線が注意深く撮られているだけで、その写真は建築写真として撮られているのだという信号になる。もう一つは日常の生活臭が写り込んでいないこと。まず人が写ってはいけけないのである。(大辻清司 1986 38)

建築写真における垂直性は建築ジャーナリズムの登場より先に出来上がっていた。そもそもカメラというものはその仕組みができたときから、建築はすでに垂直に撮られている。カメラ・オブスキュラの原理では、中の暗室にはさかさまになった外の風景が壁に映るのだが、そこでは被写体は傾かずに映る。カメラが小型化され、上を向いて撮ることが出来るようになるまでは、建築を含め、すべての被写体において垂直性は維持されていた。そのころから

現在に至るまで、垂直性の維持された写真が撮影されることになる⁹。

その後、カメラが小型化された初期の段階においては建物も低層のものが多く、垂直性を維持するために視点が建物の縦横に対してほぼ中央にくるよう、視点を高くするか、または視点の偏りが画面に対して相対的に小さくなるように視点を対象から遠ざけるかすれば垂直性を意識した写真を撮ることが出来た。しかし、19世紀末の鉄骨構造の発展に伴い、建物は急速に高層化し始めた。そのため、垂直性を維持しようとして、アオリをきかせて撮るようになった。その結果、頂部は極端に歪み、垂直性ばかりを強調された写真が撮られるようになった。当初、垂直性を維持することは、建物や人間の姿の写真による歪みを否定する自然主義に基づいたものだったが、さまざまな技法を駆使して垂直を保持することは、結局、もっとも人間の知覚から遠い形をスタイルとして作り出してしまう結果となった¹⁰。

人については当初、その露出時間の長さという技術的なものの影響で人や雲などといった動きのあるものが写らなかった。しかし、写真技術の発達によって露出時間の短縮が起これると、写真に人が写るようになる。1860年代初頭には建築雑誌にもスケッチ的なものの割合が増え、人影も小さく描かれている。そして、1870年代には建築雑誌に掲載される挿絵に大量の人物の姿が入り始めた。その後、人はより多く入るようになり、現在から見ると不必要と思われるようなところまで人が登場する。しかし、1898年ごろから人は写真から消え始める。そして、さらに技術の進歩によって人影がなくても空間を表現できるようになり、人は建築写真には登場しなくなっていくのである。¹¹

建築と人間は一方を見た瞬間に他方がみえなくなる関係がある。建築写真に主眼を置くと、そこに人の生活を感じるができないし、生活を営む人に主眼を置いたとき、建築は消えてしまう。¹²

植田実は人間を入れ込んだとしても、それは結局、建築の真実の姿を伝えることにはならないと認めている。

そこに住んでいる人を入れたり、撮影に立ち会った建築事務所のスタッフや編集者たちが、それが住宅なら食卓を囲んで坐ったりする。しかしそれは生活を撮すというよりは往々にして、文学上の用語で言うプレシオジテ(気取り文体)に転化する¹³ (植田実 1979 19-21)

建築に人を入れてもそれだけでは本当の人間の生活は見えてこない。結果として人を入れ

た建築写真は主流にならなかった。

-
- 1 三井圭司. (2005). 写真の歴史入門 第一部「誕生」新たな視覚のはじまり. 新潮社 : 10-11
 - 2 クエンティン・バジャック. (2003). 写真の歴史. (伊藤俊治 監修・遠藤ゆかり 訳). 創元社 : 21
 - 3 福屋粧子. (1998). フリーズフレーム—写真と建築の横断線—. INAX 出版. 10+1, 14 号 : 230-241
 - 4 五十嵐太郎. (1999). 情報・同時性・写真. 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 114 : 34
 - 5 福屋粧子. (1999). 建築写真の遠近法(パースペクティブ). 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 114 : 44-45
 - 6 前掲載, 注 4 p. 35
 - 7 前掲載, 注 2 p. 17-35
 - 8 前掲載, 注 3 p. 235 ここで福屋粧子は英国王立建築家協会の機関誌「Transactions of the Royal Institute of British Architects of London」(「R. I. B. A. 年鑑」)を資料としている
 - 9 日経アーキテクチャへ編集部. (2006). 「建築写真」をめぐる 15 の問い. 日経アーキテクチャ. 日経 BP 社 : 15
 - 10 前掲載, 注 3 p. 236-237
 - 11 前掲載, 注 3 p. 238-239
 - 12 磯達夫. (2001). 転移する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで. INAX 出版. 10+1, 23 号 : 77-82
 - 13 植田実. (1979). 編集者の立場から. 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 94 : 19-21

3 章

分析・考察

- 3.1 概要
- 3.2 主たる対象について
- 3.3 角度による考察
- 3.4 人の有無について
- 3.5 写真掲載順序について
- 3.6 写真サイズについて

3.1 概要

一般誌・専門誌それぞれの掲載されている対象写真をそれぞれ、竣工後の内部を撮った写真・竣工後の外部を撮った写真・竣工前の施工中の写真（工事写真など）・竣工前の設計手順をあらわす写真の4つの項目に分類したところ、表3.1.1のようになった。それをグラフ化したものが図3.1.1である。この図から撮影の対象をその中心に写っているものなどを考慮せず機械的に大まかに4つの視点に分けたところ、その割合は一般誌・専門誌の比較において大きな違いは見ることができなかった。

表 3.1.1 全体の写真構成

	竣工後		竣工前	
	内部	外部	施工段階	設計手順
一般誌	301	201	30	50
専門誌	289	213	33	23

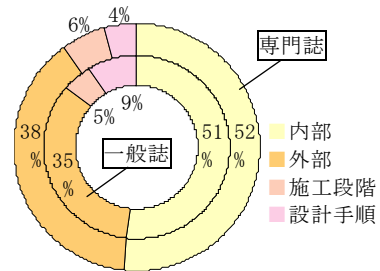


図 3.1.1 全体の写真構成図

さらに、その対象を見る視線の方向を調べたところ、一般誌・専門誌とも内から内を撮影する写真が最も多く、次に多いのは外から外を撮影する写真となった。一般誌についてはその他の項目において専門誌より大きな割合を示し、専門誌においては外から外の項目で一般誌より大きな割合を示していた。そこから、一般誌は専門誌より建築以外を紹介しながら誌面を作る傾向にあるのに対して、専門誌は一般誌より建築を外からの見えを撮影することが多いと分かる。しかし、総じて見ると各々の項目で明確な差は見ることができなかった。

表 3.1.2 視界の方向

	枚数		割合(%)	
	一般誌	専門誌	一般誌	専門誌
内から内	282	271	48.5	48.6
外から外	193	213	33.2	38.2
内から外	19	18	3.3	3.2
外から内	1	8	0.2	1.4
内から内・外	4	3	0.7	0.5
外から外・内	0	3	0	0.5
その他	83	42	14.3	7.5

そこで、以下の考察では一般誌・専門誌それぞれの対象写真の構成要素による被写体の扱いについての差異や、その撮影方法の特質、また、作品紹介がされている誌面における一般誌・専門誌それぞれの写真の取り扱い方の違いなどの考察をしていく。

3.2 主たる対象について

3.1 概要より写真の大まかな分類からは差異を見出すことはできなかった。そこで、それぞれの対象となる写真（一般誌 582 枚、専門誌 558 枚）に撮影された被写体で、その写真を構成する要素の中で最も注目されているものを主たる対象とし、その主たる対象について分類・考察する。また、対象写真における主たる対象は、写真のキャプションや構成を考慮して決定した。

3.2.1 分析方法

対象となる写真（一般誌 582 枚、専門誌 558 枚）を以下の順に沿って分類する。

- ①一般誌・専門誌に二分する
- ②それぞれの撮影時期に着目し竣工前・竣工後に二分する
- ③その中でさらに細分化し、表 3.2.1 に示す主たる対象に着目して 27 分類する。

表 3.2.1 分類表

竣工後	建築物	建築空間	内部	室(全体)、室(部分)、 通路(全体)、通路(部分)
			外部	全体、一部、部分
		部位(建築的要素)	床、壁、天井、柱、 窓(開口部)、扉、 トップライト、照明、 階段、構造、ファサード、 屋根、ディテール	
	建築物以外の要素		人、建築家、 家具・展示物、 周辺環境、庭	
竣工前	工事写真など(施工段階)			
	設計手順(模型写真など)			

3.2.2 結果

結果は表 3.2.2 に示す通りになった。表 3.2.2 は一般誌と専門誌において分類した各項目の主たる対象の絶対数とその割合を表したものである。

- ・各雑誌の対象数について

一般誌においては重要視しているものは竣工後の建築空間を撮影対象とした、「内部・室(全体)」(110 枚)、次に「家具・展示物」(71 枚)、そして竣工後の建築空間を撮影対象とした、「外部(一部)」(63 枚)という順番となった。また、専門誌の重要視しているものは竣工後の建築空間を撮影対象とした、「内部・室(全体)」(138 枚)、次に「外部(一部)」(75 枚)、そして「外部(全体)」(52 枚)という順番であった。

表 3.2.2 主たる対象による分類

			一般誌		専門誌		
			対象数	割合(%)	対象数	割合(%)	
竣工後	建築空間	内部	室(全体)	110	18.9	138	24.7
			室(部分)	20	3.4	24	4.3
		通路(全体)	13	2.2	20	3.6	
			0 ⁱ	0	6 ⁱ	1.1	
		外部	外部(全体)	34	5.8	52	9.3
			外部(一部)	63	10.8	75	13.4
	外部(部分)		17	2.9	8	1.4	
	建築物	部位(建築的要素)	床	2	0.3	0	0
			壁	17	2.9	4	0.7
			天井	0	0	0	0
			柱	2	0.3	0	0
			窓(開口部)	7	1.2	8	1.4
			扉	2	0.3	0	0
			トップライト	8	1.4	6	1.1
			照明	0	0	0	0
			階段	10	1.7	1	0.2
			構造	0	0	8	1.4
			ファサード	18	3.1	19	3.4
			屋根	2	0.3	4	0.7
			ディテール	9	1.5	46	8.2
	建築物以外の要素	人	43	7.4	6	1.1	
		建築家	43	7.4	5 ⁱ	0.9	
		家具・展示物	71	12.2	29 ⁱ	5.2	
		周辺環境	15	2.6	25	4.5	
		庭	25	4.3	29	5.2	
	竣工前	施工段階(工事中の写真など)		13	2.2 ⁱⁱ	25	4.5 ⁱⁱ
		設計手順(模型写真など)		38	6.5 ⁱⁱ	20	3.6 ⁱⁱ
計			582	100	558	100	

・両雑誌の割合比較

表 3.2.2 の中で、一般誌・専門誌を比較したとき、特徴的な差異が現れている部分を枠線で囲み、枠組 i を図 3.2.1 に、枠組 ii について図 3.2.2 にグラフ化する。

まず、一般誌のほうが専門誌より主たる要素の割合が多い特徴的な項目として竣工後の建築物以外の要素を撮影対象としたものの中で「人」、「建築家」、

「家具・展示物」、竣工前の「設計手順（模型写真など）」が挙げられる。また、逆に一般誌と専門誌の比較において、専門誌のほうが一般誌より主たる対象における割合が多い特徴的な項目として、竣工後の建築空間を撮影対象としたものの中で、「内部・室（全体）」、「内部・室（部分）」、「内部・通路（全体）」、「内部・通路（部分）」、「外部・全体」、「外部・一部」、部位を撮影対象としたものの中で「ディテール」、建築物以外の要素を撮影対象としたものの中で「周辺環境」、竣工前の「工事中の写真など（施工段階）」が挙げられる。

全体として大分類ごとに見ると、竣工後の建築空間においては内部・外部ともに専門誌の割合のほうが多い傾向が見られ、部位（建築的要素）についてはディテール以外大きな差は見られなかった。そして、建築外要素においては庭の項目以外に大きな差異が見られ、施工段階・設計手順においては一般誌・専門誌の比較においてそれぞれ特徴的な差異が出た。

3.2.3 考察

図 3.2.1 より一般誌において、人、建築家、家具・展示物の項目が重要視されていることから、空間のみならずその建築のなかで行われる営みに目を向けているがわかる。それに対し、専門誌においては建築空間内部、建築空間外部共に一般誌より高い割合で提示されてい

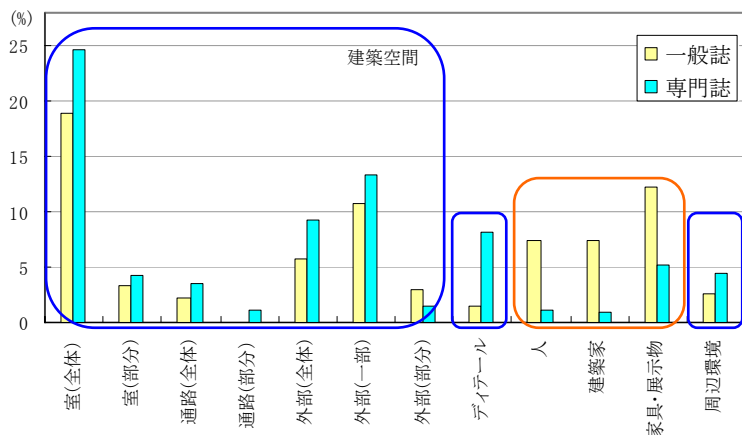


図 3.2.1 主たる対象における比較(枠線 i)

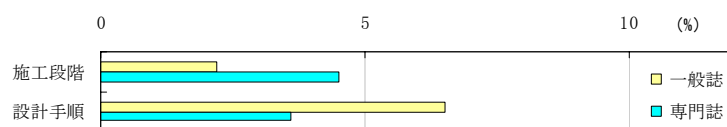


図 3.2.2 主たる対象における比較(枠線 ii)

ることが分かる。また、専門誌においては高い比率でディテールを撮影していることも分かる。そこから、専門誌においては建築的な空間構成やディテールなど、その建築自体に注目させるような写真で構成されているといえる。さらに、専門誌においては周辺環境を撮った写真も多く、対象建築を周囲とのつながりの中で体系的に説明しようとしているといえることができる。それに対して、一般誌においては実際に配置された家具を撮影対象としたり、使用者を撮影対象としたりすることで建物と人とのつながりを主に撮り、建築の空間というよりも使用風景に主に目を向けているといえる。

また、図 3.2.2 より専門誌では一般誌に比べ、施工中の工事写真を多く扱っているのに対し、一般誌においては設計段階のプロセスを扱った写真が多く見られる。そこから専門誌は実体に即した建築成立過程を重要視しているのに対し、一般誌はその建物の設計過程・設計の概念などを重要視しているといえる。

3.3 角度について

3.3.1 分析方法

一般誌・専門誌ともに対象写真各々について、主たる対象に対して一点透視で撮影されているもの（主たる対象に対して正対して撮影されているもの）・主たる対象に対して二点透視・三点透視で撮影されているもの（主たる対象に対して正対せずに撮影されているもの）・主たる対象に対して消失点があはつきりしないものの3項目に分け、それぞれ「振っていない」、「振っている」、「その他」として分類する。



図 3.3.1
振っていない写真の例
金沢 21 世紀美術館
(新建築 2004 年 11 月号 p. 73)



図 3.3.2
振っている写真の例
金沢 21 世紀美術館
(CasaBUTUS No. 62 p. 67)



図 3.3.3
その他の写真の例
ビエニマレ・ノマディック・ミュージアム
(CasaBUTUS No. 62 p. 64)

3.3.2 結果

表 4.2.1 は主たる対象の分類にしたがって、各項目に含まれる写真を「振っていない」、「振っている」、「その他」の3項目に分け、それぞれについて対象となる写真の枚数を左側の項目で表し、右側でそれぞれの主たる対象ごとに3項目の占める割合を示したものである。

表 3.3.1 主たる対象と角度の関係について

				枚数						割合(%)						
				一般誌			専門誌			一般誌			専門誌			
				振っている	振っていない	その他	振っている	振っていない	その他	振っている	振っていない	その他	振っている	振っていない	その他	
竣工後	建築空間	内部	室(全体)	59	51	0	49	89	0	53.6	46.4	0	35.5	64.5	0	
			室(部分)	12	8	0	9	15	0	60	40	0	37.5	62.5	0	
			通路(全体)	2	11	0	2	18	0	15.4	84.6	0	10	90	0	
			通路(部分)	0	0	0	2	4	0	0	0	0	33.3	66.7	0	
			小計	73	70	0	62	126	0	51	49	0	33	67	0	
		外部	全体	19	14	1	29	20	3	55.9	41.2	2.9	55.8	38.5	5.8	
			一部	36	15	12	41	33	1	57.1	23.8	19	54.7	44	1.3	
			部分	12	4	1	3	4	1	70.6	23.5	5.9	37.5	50	12.5	
			小計	67	33	14	73	57	5	58.8	28.9	12.3	54.1	42.2	3.7	
			建築物	部位 (建築的要素)	床	2	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0
	壁	12			5	0	3	1	0	70.6	29.4	0	75	25	0	
	天井	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	柱	2			0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	
	窓(開口部)	4			3	0	5	3	0	57.1	42.9	0	62.5	37.5	0	
	扉	0			2	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	
	トップライト	7			1	0	4	2	0	87.5	12.5	0	66.7	33.3	0	
	照明	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	階段	7			3	0	0	1	0	70	30	0	0	100	0	
	構造	0			0	0	4	4	0	0	0	0	50	50	0	
	ファサード	7			11	0	6	13	0	38.9	61.1	0	31.6	68.4	0	
	屋根	1			0	1	4	0	0	50	0	50	100	0	0	
	ディテール	4			3	2	16	30	0	44.4	33.3	22.2	34.8	65.2	0	
	小計	46	28	3	42	54	0	59.7	36.4	3.9	43.8	56.3	0			
	建築物以外の要素	人	20	11	12	1	3	2	46.5	25.6	27.9	16.7	50	33.3		
		建築家	7	8	28	1	0	4	16.3	18.6	65.1	20	0	80		
		家具・展示物	33	31	7	13	16	0	46.5	43.7	9.9	44.8	55.2	0		
		周辺環境	6	5	3	2	8	15	42.9	35.7	21.4	8	32	60		
		庭	9	11	5	10	14	5	36	44	20	34.5	48.3	17.2		
	小計	75	66	55	27	41	26	38.3	33.7	28.1	28.7	43.6	27.7			
	竣工前	工事写真など(施工段階)	1	0	12	10	2	12	7.7	0	92.3	41.7	8.3	50		
		設計手順(模型写真など)	11	4	24	9	4	8	28.2	10.3	61.5	42.9	19	38.1		
	計				273	201	108	223	284	51	46.9	34.5	18.6	40	50.9	9.1

・両誌における枚数について

表 3.3.1 より、一般誌においてすべての小計で振っている枚数が振っていない枚数よりも多いことが分かる。しかし、建築空間内部においてはその差が顕著に見られなかった。(振っている73枚・振っていない70枚・その他0枚) また、竣工前の段階を撮影したものについてはその他の項目が多いという結果になった(振っている22枚・振っていない4枚・その他36枚)。一方、専門誌においては建築空間内部(振っている62枚・振っていない126枚・その他0枚)・部位(建築的要素)(振っている16枚・振っていない30枚・その他0枚)・建築物以外の要素(振っている27枚・振っていない41枚・その他26枚)において振らず

に撮影された写真の割合が多く、建築空間外部（振っている 73 枚・振っていない 57 枚・その他 5 枚）と竣工前を主たる対象（振っている 19 枚・振っていない 6 枚・その他 20 枚）として撮影された写真については正対せずに撮影される傾向にある。

・両誌の割合の比較について

建築空間外部を撮影対象にした写真以外の項目で一般誌において正対せずに（振っているとその他）撮影する傾向と専門誌において正対（振っている）して撮影する傾向が顕著に見られた。建築空間外部においては一般誌・専門誌共に正対せずに撮影する傾向を読み取ることができるが、一般誌はその他の項目が次に大きな割合を占めるのに対し、専門誌においては振っていない項目が次に大きな割合を占め、専門誌において外部空間を正対して撮影する傾向が一般誌に比べて高

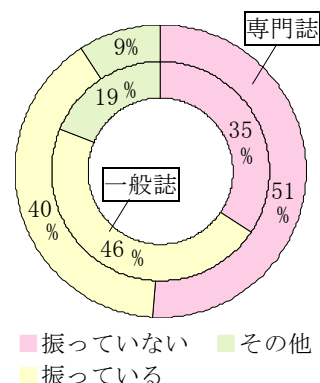


図 3.3.4 全掲載写真について

いことを読み取ることができる。また、図 3.3.4 より全写真の中で比較しても、一般誌は主たる対象に正対せずに振って撮る傾向がみられ、専門誌は振らずに主たる対象に正対して撮る傾向がみられる。

3.3.3 考察

一般誌においては対象に対して正対せず撮影されることが多く、専門誌においては対象に正対して撮影される傾向を見て取ることができる。対象を正対して撮影することは画面構成として一点透視で撮影されているものである。ここで、絵画において一点透視図法はルネサンス期に生まれ発達した¹。さらに、美術史家のエルヴィン・パノフスキー (Erwin Panofsky) は一点透視の技法はその透視図法は必ずしも人間の自然な視覚の原理には即していなかったことを指摘した²。

この「中心遠近法」全体は、完全に合理的な空間、すなわち無限で連続的で等質的な空間の形成を保証しうるように、暗黙のうちに二つのきわめて重要な前提を立てている。第一に、われわれがただ一つの動くことのない眼で見ているということ、次に、視覚のピラミッドの平らな切断面が、われわれの視像の適切な再現とみなされてよいということ、こうした二つ

の前提を、である。だが、実際には、こうした二つの前提を立てるということは、ひどく思いきって現実（われわれとしては、このばあい事実的主観的な視覚印象を「現実」と呼んでおいてさしつかえあるまい）を捨象してしまうということである。なぜなら、無限で連続的な等質的空間、つまりは純粹に数学的な空間の構造は、精神生理学的空間の構造とは正反対のものだからである。（E. パノフスキー 2003 p. 11）

つまり、人間の視覚に自然に認識されていた像が中心遠近法の発達によって、人間の目に見える空間は水平・垂直で構成され、その像は一点に収束してくると認識されるようになったが、それは思い込みによるものであり、そういった空間に対する視覚は錯覚であると言及している。

専門誌においては、室の空間構成を伝える時の手段として振らずに、対象に正対して撮影されることが多い。対象に対して正対して撮影するという事はパノフスキーの言う中心遠近法の構成と同じものであるとみなすことができる。ここで、一点に収束する消失点を持つこれらの写真はひとつの消失点へ向かう直線状に視点を持つものとなり、その視線の動きは制限される。その視覚は正対せずに撮影される場合に比べ、視覚の可変性が統制されることにつながるともいえよう。

また、柄谷行人は『内省と遊行』で遠近法を「深層」と比較する文脈の中で、

近代の遠近法が確立されるまでの絵画には、「奥行」がない。この奥行きは、消失点作図法という、芸術的というよりは数学的な努力の過程で確立されたのであって、それは現実、いいかえれば知覚にとって存在するものではなく、もっぱら“作図上”存在するのである。〔…中略…〕この遠近法空間に慣れるや否や、われわれはそれが“作図上”存在するという事を忘れて、“現実”をそれまでの絵画がみていないかのように考えがちである。〔…中略…〕近代絵画における奥行きは、1つの中心的な消失点に対する事物の配置において出現する。つまりわれわれに奥行きを感じさせているのは、ある種の配置なのである。（柄谷行人 1980 p. 64-65）

と言及し、一点透視図法における絵画性と、人間の知覚にとっての不自然さを述べている。

一般に人間は日常生活において耐えず運動し、それに伴い視点も絶えず動いている。そのため、空間を正対せずに視覚的に認識する傾向がある。そのため、人間の日常生活において

正対して見ることは、人間の絶えず動いていることによる、視線の連続性の中で現れる瞬間的な出来事であり、ひとつの特異点と言うこともできる。

よって、正対せずに振って撮影された写真は人間の視点に近いといえることができる。つまり、一般誌の掲載写真は正対せずに撮影されることが多いという傾向から人々の視覚としてより自然で一般的な像を提示しているといえ、専門誌の掲載写真は正対して撮影されることが多いという傾向から数学的につくられる像を提示しているといえる。

3.4 人の有無について

3.4.1 分析方法

人の有無に着目し 3.1 で分類した主たる対象ごとに、各項目に含まれる有人写真の数をカウントする。また、その質的差異も考察する。

3.4.2 結果

結果は表 3.4.1 に示すとおりになった。表 3.4.1 は右側で掲載雑誌における有人写真の枚数を示し、左側で対象建築においてその有人写真の枚数が掲載枚数に占める割合を示したものであり、表 3.4.2 にその概要を示した。

表 3.4.2 有人写真について

	一般誌	専門誌
掲載件数	51	44
有人写真の扱われている件数	38	27
全件数に対する割合	74.5%	61.4%
全掲載写真枚数	582	558
有人写真の枚数	179	119
有人写真の割合	30.8%	21.3%

表 3.4.2 から、有人写真が含まれて紹介されている作品数は一般誌が延べ 51 件中 38 件 (74.5%) であったのに対して専門誌が 44 件中 27 件 (61.4%) となり、有人写真も含めて作品紹介される傾向は一般誌においてより顕著に見られることも分かった。さらに、有人写真の掲載枚数・両誌ごとの分析対象となる掲載写真全体に占める有人写真の割合のどちらも一般誌 (179 枚, 30.8%) のほうが専門誌 (119 枚, 21.3%) より多いということが分かった。

また、3.2 の主たる対象についてでも分かったとおり、人や建築家を主たる対象として撮影してある枚数も専門誌に比べ、一般誌のほうが多い。これらのことから、一般誌において有人写真が注目されていることが分かる。

表 3.4.1 それぞれの建築に対する有人写真の枚数

設計者	建物名	建物用途	一般誌						専門誌					
			掲載号			掲載枚数	有人写真	割合 (%)	掲載号			掲載枚数	有人写真	割合 (%)
			vol.	年	月				年	月				
安藤忠雄	淡路夢舞台	複合施設	6	2000	spring	8	0	0	新建築	2000	7	29	5	17.2
谷口吉生	東京国立博物館法隆寺宝物館	博物館	7	2000	summer	7	0	0	新建築	2001	5	18	0	0
谷内田章夫	ALTO B	集合住宅	8	2000	11	6	0	0	新建築	1997	6	8	1	12.5
伊東豊雄	せんだいメディアテーク	情報文化施設	12	2001	3	6	1	16.7	新建築	2001	3	39	20	51.3
荒川修作	養老天命反転地	公園	12	2001	3	12	1	8.3	新建築	1995	11	10	6	60
安藤忠雄	アルマーニ/テアトロ	劇場	19	2001	10	8	1	12.5	新建築	2001	12	12	2	16.7
安藤忠雄	国際子ども図書館	図書館	20	2001	11	6	0	0	新建築	2002	7	9	0	0
伊東豊雄	東雲キャナルコートCODAN2街区	集合住宅	29	2002	8	11	1	9.1	新建築	2003	9	14	4	28.6
安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	30	2002	9	30	13	43.3	新建築	2003	5	10	2	20
安藤忠雄	ピュリッツァー美術館	美術館	30	2002	9	6	3	50	新建築	2002	3	13	3	23.1
安藤忠雄	淡路夢舞台	複合施設	30	2002	9	11	9	81.8	重複につき上記参照					
安藤忠雄	国際子ども図書館	図書館	30	2002	9	13	2	15.4	重複につき上記参照					
安藤忠雄	直島コンテンポラリーアートミュージアム+アネックス	複合施設	30	2002	9	12	2	16.7	新建築	1996	7	7	0	0
安藤忠雄	大阪府立近つ飛鳥博物館	博物館	30	2002	9	10	2	20	新建築	1994	9	17	7	41.2
安藤忠雄	大阪府立狭山池博物館	博物館	30	2002	9	10	2	20	新建築	2001	11	13	4	30.8
川久保玲+河崎隆雄	コムデギャルソン京都店	物販販売	32	2002	11	7	2	28.6	新建築	2002	9	8	0	0
安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	36	2003	3	9	2	22.2	重複につき上記参照					
伊東豊雄	せんだいメディアテーク	情報文化施設	40	2003	7	7	5	71.4	重複につき上記参照					
安藤忠雄	フォートワース現代美術館	美術館	42	2003	9	40	18	45	重複につき上記参照					
安藤忠雄	野間自由幼稚園	教育施設	42	2003	9	10	7	70	新建築	2004	7	10	5	50
安藤忠雄	4m×4mの家	住宅	42	2003	9	6	3	50	住宅特集	2003	6	10	0	0
青木淳	ルイ・ヴィトン六本木ヘルズ店	物販販売	44	2003	11	17	5	29.4	新建築	2003	10	15	1	6.7
三分一博志	北向傾斜住宅	住宅	48	2004	3	6	0	0	住宅特集	2003	11	9	0	0
眞田大輔+名和研二	SHS	住宅	48	2004	3	6	0	0	住宅特集	2004	3	13	1	7.7
手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	屋根の家	住宅	48	2004	3	6	3	50	住宅特集	2001	8	7	1	14.3
小嶋一浩+曲淵英邦	スペースブロック ハノイモデル	集合住宅	48	2004	3	8	2	25	新建築	2003	9	25	9	36
坂倉・清田・構造計画設計共同体	ラ・ヴェール明石町	集合住宅	49	2004	4	7	0	0	新建築	2004	8	6	0	0
安藤忠雄	地中美術館	美術館	55	2004	10	33	3	9.1	新建築	2004	9	15	1	6.7
安藤忠雄	Invisible House	住宅	55	2004	10	7	0	0	新建築	2005	3	8	0	0
SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	55	2004	10	7	0	0	新建築	2004	11	12	7	58.3
青木淳	ルイ・ヴィトン銀座並木通り店	物販販売	56	2004	11	20	6	30	新建築	2004	10	10	5	50
谷口吉生	ニューヨーク近代美術館	美術館	58	2005	1	69	29	42	新建築	2005	9	21	16	76.2
青木淳	G	住宅	59	2005	2	6	2	33.3	新建築	2004	9	8	0	0
阪根宏彦	九段の家	住宅	59	2005	2	6	1	16.7	住宅特集	2004	8	11	0	0
手塚貴晴+手塚由比/池田昌弘	展望台の家	住宅	59	2005	2	8	0	0	住宅特集	2005	1	7	0	0
ブランク・ラリヴィエ+山代悟	Y-house	集合住宅	59	2005	2	7	6	85.7	新建築	2005	2	10	2	20
山本理顕	エコムスハウス	住宅	59	2005	2	8	3	37.5	新建築	2004	9	6	0	0
伊東豊雄	アルミコテージ	別荘	59	2005	2	7	1	14.3	新建築	2004	12	20	3	15
難波和彦	箱の家-83	住宅	59	2005	2	7	1	14.3	住宅特集	2004	5	7	0	0
千葉学	MESH	集合住宅	59	2005	2	6	1	16.7	新建築	2004	6	6	0	0
杉千春+高橋真奈美	Barenhaus	集合住宅	59	2005	2	7	0	0	新建築	2005	2	8	1	12.5
木下道郎	barres	集合住宅	59	2005	2	6	0	0	新建築	2005	8	10	1	10
坂茂	ピアニマル/ノマディック・ミュージアム	美術館	62	2005	5	6	5	83.3	新建築	2005	4	7	0	0
SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	62	2005	5	13	10	76.9	重複につき上記参照					
ヨロミノマコト	富弘美術館	美術館	62	2005	5	20	4	20	新建築	2005	4	35	3	8.6
安藤忠雄	hhstyle.com/casa	物販販売	63	2005	6	13	7	53.8	新建築	2005	7	6	1	16.7
横総合計画事務所	国立国語研究所	研究施設	63	2005	6	6	0	0	新建築	2005	1	13	0	0
法政・早稲田・横浜国立・日本女子大学ワークショップ	月影の郷(リノベーション)	宿泊施設	65	2005	8	8	2	25	新建築	2005	9	14	4	28.6
竹中工務店	竹中工務店東京本社	オフィスビル	67	2005	10	10	3	30	新建築	2004	12	9	0	0
イサム・ノグチ	モエレ沼公園	公園	67	2005	10	11	8	72.7	新建築	1996	12	13	4	30.8
SANAA(妹島和世+西沢立衛)	金沢21世紀美術館	美術館	69	2005	12	6	3	50	重複につき上記参照					
計						582	179	30.8				558	119	21.3

3.4.3 ロラン・バルトの写真論

写真における人の写りこみの有無について考察するときに、ロラン・バルトの「ストゥディウム」と「プンクトゥム」という概念は有効である。そのため、以下に「ストゥディウム」と「プンクトゥム」の概念を説明する³。

ロラン・バルトは写真の要素には「ストゥディウム」と「プンクトゥム」が存在するとし

ている。ストゥディウムとは広がりを持ち、写真に関心を抱き、それらを政治的証言として受けとめたり、歴史的場面として味わったりする一般的関心のことである。対して、プンクトウムはストゥディウムを破壊し、その写真の要素に注目させ、より想像力を描き立てるものにするものである。バルトは、

プンクトウムとは、刺し傷、小さな穴、小さな斑点、小さな裂け目のことであり—しかもまた、骰子の一振りのことであるからだ。ある写真のプンクトウムとは、その写真のうちにあって、私を突き刺す（ばかりか、私にあざをつけ、私の胸をしめつける）偶然なのである。

（ロラン・バルト 1985 39）

といい、プンクトウムは写真に偶然入り込み、その存在によって見るものに深い印象を与えるものとしている。また、

ある種の細部は、私を《突き刺す》ことができるらしい。[…中略…] わざとらしいコントラストは、私に対して何の効果も及ぼさない。[…中略…] 私の関心を引く細部は意図的なものではない。（ロラン・バルト 1985 61）

ともいい、印象に残る写真の要素として、プンクトウムは意図的なものではあってはならず、思惟的に撮られた写真は魅力が薄いとも言及している。さらに、ストゥディウムはコード化されているものだとし、そこには発展的な解釈ができないものとされた。バルトの言う《細部》は、文字通り物理的に小さな部分、という意味を持つとともに「一般的関心」や「作者の意図」にとっては些細な、どうでもいいものも含まれる。そのため、プンクトウムは一般的コードに従った、表層を読み取るだけの読み方ではなく、それを解放するものであるともいえる。最後にバルトは、

《分別のある》写真（ただストゥディウムだけを充当された写真）を読み取る高邁な動作は、怠惰な動作である。[…中略…] これとは逆に、プンクトウムの読み取り（もしこう言ってもよければ、先のとがった写真の読み取り）は、簡潔で、活発で、野獣のように引き締まっている。（ロラン・バルト 1985 63）

と述べ、写真におけるプントゥムの重要性を語っている。

ここで、人の顔というものは表情にあふれているものである。それは建築よりはるかに多くのことを語る。そして、それを見た人もただ建築が写っているよりも人の表情や態度の意味する所からその場の空気を読み取りやすい。また、プントゥムの性質を持つ写真とはその写真に写りこんでいるものからその裏の意味、その表層だけではないものを想像させることともいえ、人が写っているということとその裏に別の想像がより生まれやすいということにつながる。さらに、建築写真における人を排除した性質は前章の2.4で示したとおり、建築写真のコードのひとつに数えられる。建築写真は空間を主張するものであり、その中に写る人は異質なものである。つまり、そこに写り込む人は建築写真のコードの中にあられた一種の偶発性とも言うことができるため、そこに写り込む人の表情や行動はプントゥムの性質を持ちやすいものといえる⁴。

3.4.4 考察

人を入れた写真というのは長い間、建築写真の範疇の外にあるものとされていた。しかし、一般誌においてその建築写真のルールを崩すように撮られた写真による作品紹介がされるようになってきた。

一般誌においては人が一緒に撮影された写真が多いことが分かる。人が写りこんだ写真を多く載せているということによって、その建物が実際に使われている様子、また、人と建築とのつながりなどを読者に訴える。また、建築家自身も多くの写真で写っていることから（図 3.4.1 建築家の登場する写真）、建築をその建築家の作品として位置づける姿勢もみうけられる。実際に設計した建築家が登場することによって、建築家自身にとっても一種の宣伝効果をもたらす。さらに、建築物よりもそこで活動する人を主たる対象にした写真も多い。そういった写真の中には図 3.4.2 のように建築がほぼ写らず、その場で行われている行為を主体として撮影しているものも数多く見受けられる。

また、専門誌においては人を排除した写真が多く、あく



図 3.4.1 建築家の登場する写真
フォートワース現代美術館
(CasaBRUTUS No. 30 p. 42)



図 3.4.2 人のみに注目した写真
野間自由幼稚園
(CasaBRUTUS No. 42 p. 174)

まで建築自身を主体にして撮影されている。そこには建築と人とのつながりを撮るといった姿勢ではなく、あくまで主体である建築の記録写真といった姿勢が見ることができる。さらに、図 3.4.3 に見るように専門誌には人は写っているのだが、動きを感じない恣意的に配置された姿で人が撮影されている写真が少なからず見受けられる。そういった写真について建築家の堀池秀人は新建築の月評において「あまり動きを感じることのない（いってみるならばギョチないポーズの）演出された人物写真⁵」を否定し、そのオリジナリティのなさを、建築家の自堕落とした⁶。そういった演出された人が配置され



図 3.4.3 動きの感じられない写真の例
富弘美術館
(新建築 2005 年 4 月号 p. 60)

撮影された写真は、ひとつの専門誌における定式化されたコードになっているともいえる。そういった写真に登場する人はヒューマンスケールとして空間の広がりへの認識を手助けすることにはつながっても、建築の使用風景やその建築と人とのつながりは見出すことができない。そこには建築空間を見せるという目的ははっきりと読み取ることができるが、想像力を働かせその裏に繰り広げられる物語を感じることはできないだろう。

ここで、ロラン・バルトの「プンクトゥム」と「ストゥディウム」の概念に従うと、専門誌の写真は図 3.4.3 や図 3.4.4 に示すようにコード化された動きの感じられない人の配置や記録的性格などからストゥディウムの性質が強く、一般誌の写真は図 3.4.5 に示すように有人写真の多さや、人や建築家が主たる対象になるケースが多く、そこでの動きを撮影しているということからプンクトゥムの性質が強いといえる。そのため、専門誌に掲載される写真は表層の意味しか伝えないもの、一般的関心以上のものを伝えないものが多いといえる。一方、一般誌についてはその写真の裏にある物語を想起させるようなものが多いといえる。一般誌に登場する写真はそうしたプンクトゥムの効果によって専門誌に比べ、印象的で想像力をかきたてるものとなっているといえよう。



図 3.4.4 「G」のチャイルドルームにおける比較（専門誌）
(新建築 2004 年 9 月号 p. 146)



図 3.4.5 「G」のチャイルドルームにおける比較（一般誌）
(CasaBRUTUS No. 59 p. 20)

3.5 写真掲載順序について

3.5.1 分析方法

一般誌・専門誌それぞれにおいて作品紹介における写真の掲載順序に注目し、対象写真の主たる対象の分類によって、「建築空間内部」、「建築空間外部」、「部位（建築的要素）」、「建築外要素」、「施工段階（工事写真など）」、「設計手順」の6項目に分け、その6項目における掲載順番ごとの作品件数を分析し考察する。

また、順序はキャプションで紹介されている順序を採用し、特にキャプションから順序が読み取れないときや、キャプションが書かれていないときは、図3.5.1にしたがって誌面構成から番号を割り振った。また、縦と横に同サイズの写真があって構成されているときには縦の並びを優先させた。

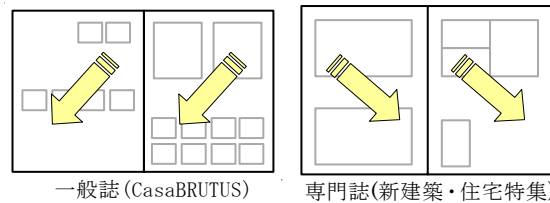


図 3.5.1 順序の割り振り

3.5.2 結果

表 3.5.1 写真掲載順序

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	…
一般誌	建築空間内部	12	11	14	18	21	15	6	3	1	2	1	2	1	1	1	2	2	1	0	3	…
	建築空間外部	20	15	9	10	5	10	6	7	4	3	2	2	1	0	0	1	2	2	4	2	…
	部位(建築的要素)	5	3	8	7	7	9	7	5	3	2	3	1	1	2	0	0	1	1	2	0	…
	建築外要素	14	20	16	13	16	14	14	7	6	8	5	4	4	2	3	2	2	2	0	1	…
	施工段階	0	0	0	0	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	…
	設計手順	0	2	4	3	1	2	2	3	5	2	3	2	2	1	2	2	0	0	0	0	…
専門誌	建築空間内部	1	7	17	20	22	17	23	12	18	6	8	5	3	7	1	3	3	3	2	2	…
	建築空間外部	27	27	18	12	7	12	7	7	3	5	1	2	1	1	1	1	0	1	0	…	
	部位(建築的要素)	9	5	3	6	6	7	3	5	1	4	0	3	5	1	4	1	2	1	1	1	…
	建築外要素	5	4	5	4	5	4	5	10	6	7	7	6	5	2	3	2	1	2	1	2	…
	施工段階	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	…
	設計手順	1	0	0	1	3	3	2	1	1	4	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	…

6項目における掲載順番ごとの作品件数は以下の表3.5.1に示すとおりになった。また、それをグラフ化したものが図3.5.2である。

表3.5.1及び図3.5.2から、一般誌・専門誌ともに冒頭に建築空間外部を、つぎに建築空間内部を取り上げている傾向が見られる。しかし、その傾向は専門誌においてより顕著に現れている。また、一般誌においては建築外要素も冒頭部分で建築空間内部や建築空間外部と同等に扱われていることが分かる。全体としてみても、一般誌には順序に一定の決まりはあまり見受けられない。

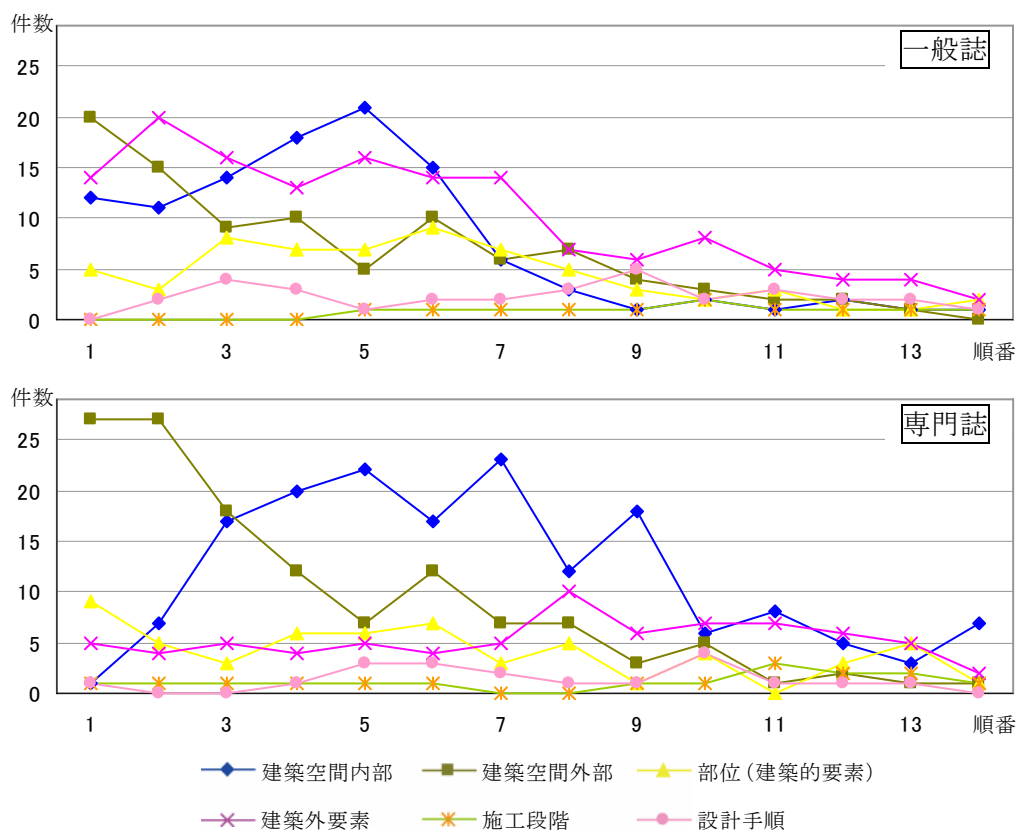


図 3.5.2 写真掲載順序

3.5.3 考察

以上の結果から、専門誌は建築を外部から内部へと順番に紹介し、空間構成を理解しやすいような順番での誌面構成を徹底しているといえる。それは人が対象建築にアプローチするときの視点の移動にそった構成で、空間構成を把握しやすいような順序であるといえる。一方、一般誌は専門誌に比べると順序の決まりがはっきりしておらず、専門誌のような定式にとられない作品紹介がされている。また、建築外要素も建築空間内部・建築空間外部などと同等に扱われていることから、空間のみならず建築物が使われている様子や周囲とのつながりを意識しているといえる。そこから、一般誌については建築の空間構成よりもむしろその建築の特徴となる部分を自由に扱う傾向を見ることができる。

3.6 写真サイズについて

3.6.1 分析方法

一般誌・専門誌それぞれにおいて作品紹介における写真サイズに注目し、対象写真の主たる対象の分類によって、「建築空間内部」、「建築空間外部」、「部位（建築的要素）」、「建築外

要素」、「工事写真など」、「設計手順」の6つに分類し、それにおける写真の大きさの作品件数を分析し考察する。

まず、一般誌・専門誌それぞれの1ページの誌面のサイズ（一般誌 CasaBRUTUS：284mm×230mm、専門誌 新建築・新建築住宅特集：297mm×220mm）を基準とし、図 3.6.1 及び図 3.6.2 に示すとおり 3.1%未満の写真の小写真・3.1%以上 9.4%未満の写真を約 1/16・9.4%以上 18.8%未満の写真を約 1/8・18.8%以上 37.5%未満の写真を約 1/4・37.5%以上 75.0%未満の写真を約 1/2・75.0%以上 150.0%未満の写真を約 1/1・150.0%以上の写真を約 2/1 として各写真を分け、それぞれの項目に含まれる主たる対象を基に考察をする。

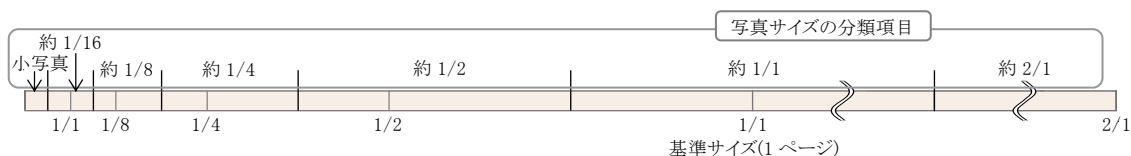
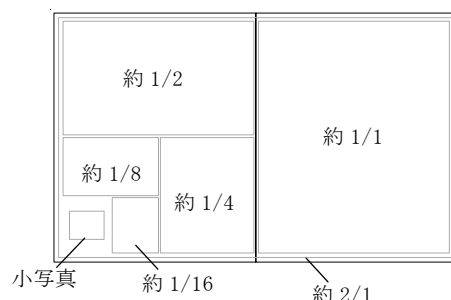


図 3.6.2 写真サイズの分類

3.6.2 結果

結果は表 3.6.1 に示すとおりになった。表 3.6.1 は表の右側で具体的な枚数について示し、左側で各項目の割合を示している。また、図 3.6.3 は一般誌・専門誌の各サイズの枚数について、図 3.6.4 は一般誌・専門誌のサイズごとの割合について 6 項目の変遷をグラフにしたものである。

表 3.6.1 写真サイズについて

		枚数								各サイズ分類内での割合							
		内部	外部	部位	建築外要素	施工段階	設計手順	計	割合	内部	外部	部位	建築外要素	施工段階	設計手順	計	
一般誌	小写真	~3.1%	53	51	19	86	12	32	253	43.5	20.9	20.2	7.5	34	4.7	12.6	100
	約1/16	3.1%~9.4%	40	22	31	32	0	4	129	22.2	31	17.1	24	24.8	0	3.1	100
	約1/8	9.4%~18.8%	16	8	5	27	0	0	56	9.6	28.6	14.3	8.9	48.2	0	0	100
	約1/4	18.8%~37.5%	5	7	8	10	1	1	32	5.5	15.6	21.9	25	31.3	3.1	3.1	100
	約1/2	37.5%~75%	10	4	4	17	0	1	36	6.2	27.8	11.1	11.1	47.2	0	2.8	100
	約1/1	75%~150%	14	19	10	21	0	0	64	11	21.9	29.7	15.6	32.8	0	0	100
	約2/1	150%~	5	3	0	4	0	0	12	2.1	41.7	25	0	33.3	0	0	100
	計		143	114	77	197	13	38	582	100	24.6	19.6	13.2	33.8	2.2	6.5	100
専門誌	小写真	~3.1%	0	0	21	15	6	4	46	8.2	0	0	45.7	32.6	13	8.7	100
	約1/16	3.1%~9.4%	41	21	21	26	13	8	130	23.3	31.5	16.2	16.2	20	10	6.2	100
	約1/8	9.4%~18.8%	21	12	14	10	0	8	65	11.6	32.3	18.5	21.5	15.4	0	12.3	100
	約1/4	18.8%~37.5%	25	17	4	11	3	0	60	10.8	41.7	28.3	6.7	18.3	5	0	100
	約1/2	37.5%~75%	38	16	11	12	1	0	78	14	48.7	20.5	14.1	15.4	1.3	0	100
	約1/1	75%~150%	35	37	17	10	1	0	100	17.9	35	37	17	10	1	0	100
	約2/1	150%~	28	32	8	10	1	0	79	14.2	35.4	40.5	10.1	12.7	1.3	0	100
	計		188	135	96	94	25	20	558	100	29	24.2	17.2	16.8	4.5	3.6	100

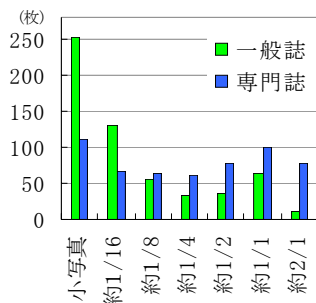


図 3.6.3 各サイズの写真枚

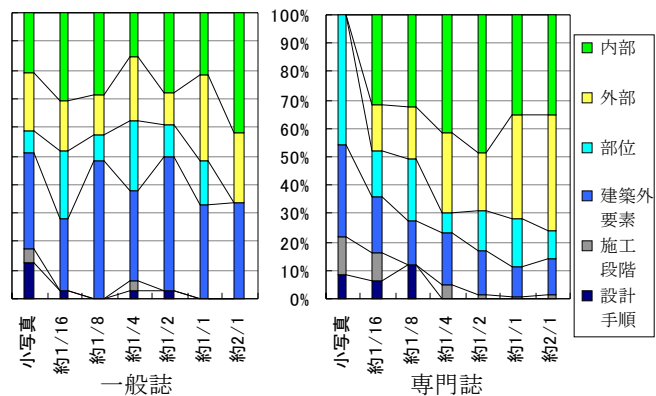


図 3.6.4 各分類の割合

まず枚数について、一般誌は小写真が全体の 43.5%を占め、最も多いことが分かる。また、写真サイズが大きくなるほど取り上げられる枚数は減っている傾向にある。また、総じて一般誌は小さい写真で作品紹介をしているといえる。一方、専門誌については約 1/16 のサイズの写真が 23.3%で最も大きな割合を占めているが、一般誌に比べると取り上げられる写真サイズに明確な特徴は見られず、小さい写真から大きな写真まで均等に扱っている傾向が見られる。

また、各項目の割合について、一般誌は設計手順については小写真に集中しているのを読み取ることができるが、それ以外の撮影対象と写真サイズには明確な相関関係は見られず、それぞれの部分を均等に扱う傾向があるといえる。それに対し、専門誌においては、小さい写真では部位・建築外要素や施工段階・設計手順の割合が多いことがわかり、写真が大きくなるにつれて建築空間外部・建築空間内部の全体像を撮影している写真の割合が多くなることが分かる。

3.6.3 考察

これらから、専門誌は様々な大きさの写真を使うのに対し、一般誌は小さいサイズの写真を中心に構成されているということが出来る。また、専門誌においては全体像を大きく、部位や建築外要素を小さく扱っている傾向が見られる。言い換えると、専門誌においては掲載写真の扱われ方がある程度決まっているのに対し、一般誌では大きさについて定式化された扱われ方はなく様々な種類の写真を大きさの関係なしに扱っているといえる。また、専門誌は建築空間を伝えることを主な目的としているのに対し、一般誌についてはその建築の特徴的な場面を撮影しているといえる。

-
- 1 高橋達夫. (1990). イタリア初期ルネサンス美術 15世紀の北方美術. 高階秀爾 (監修). 西洋美術誌, 美術出版社. V章: 69-84.
 - 2 エルヴィン・パノフスキー. (2003). 〈象徴形式〉としての遠近法, (木田元). 哲学書房
 - 3 ロラン・バルト. (1985). 明るい部屋 写真についての覚書, (花輪光 訳). みすず書房.
 - 4 福屋粧子は「建築写真に限らず、多くの場合、写真のなかに写りこんだ人物は鑑賞者にとってのブントウムとなりうる。それは建築の写真にとってのノイズであり、しかも単なる雑音ではなく、どんなに小さくとも画面全体を支配してしまう」と述べている。 福屋粧子. (1998). 建築はどのように伝達されるか 制度としての建築写真. 彰国社. 建築文化, 1998年2月号: 218-224
 - 5 堀池秀人. (1997). 新建築月評. 新建築社. 新建築, 1997年7月号: 284
ここで堀池秀人は新建築5月号の月評に対する山本理顕の意見に対し返答する形で、あまり動きを感じることはない演出された人物写真を批判したが、子どもたちで満ち溢れた写真や人間の自然な振る舞いを見せてくれるような人間の自然な振る舞いを見せてくれるような写真は肯定した。
 - 6 堀池秀人. (1997). 新建築月評. 新建築社. 新建築, 1997年5月号
ここで堀池は新建築1997年4月号に掲載された山本理顕の横浜市下和泉地区センター・横浜市下和泉地域ケアプラザにおいての紹介で動きの感じられない人の配置を否定した。また、そのような人を入れた写真は妹島和世が始めたものとした。

結

以上、一般誌と専門誌の掲載写真を比較することによって、一般誌が提示する建築のイメージの一端を明らかにした。そこから、

- ① 専門誌はあくまで建築空間を重要視し撮影しているのに対し、一般誌は建築空間のみならず、空間以外の要素も重要視し撮影していること。
- ② 一般誌において専門誌より建物と人とのつながりに注目している傾向が顕著に見られること。
- ③ 一般誌は専門誌に比べ、より人間の視覚に近い自然な視点で撮影されていること。
- ④ 専門誌において 스튜디오の性質を持つ写真が多いのに対し、一般誌においてはプリントウムの性質を持つ写真が多いこと。
- ⑤ 専門誌はある程度定式化された誌面が作られているのに対し、一般誌はさまざまな視点から建築像を自由な編集方針で扱っていること。

の上記5項目が分かった。

すなわち、一般誌は人の視線を重視し、定式にとらわれない多様なイメージを提供しているのに対し、専門誌は記録的性格が強く、主として対象建築における空間構成を提示しているといえる。

また、一般誌においてはその建築と人とのつながりや関係性が撮影されていることから、読者自身がその建築を生きられたものであると解釈できるような空間イメージを提供していることができるだろう。多木浩二は生きられた空間について、そこに住む人間の行為が空間における質の違いを作り出しているといい、さらに、

生きられた家がわれわれをひきつけるのは、なによりもまず、このように人間によって生きられた空間と時間の性質があらわれた記号群であるからであるが、それだけではなくこの記号には階層化された社会のなかでの欲望—生活術がつくりだすさまざまな虚構的現象が読み取れるからである。(多木浩二 2001 p.8) ¹

と述べ、空間は人間の生活が投影されることによって空間は生きられたものになり、そういった空間は私たちをひきつけるものになるとした。

日本の空間は使用だけが規定する、といってよかろう。使用とは別のいい方をすれば「出来事」である。われわれにとって空間とは出来事である。(多木浩二 2001 p.40)

といい、空間の日常性とそこで起こる行為の重要性を示した。また、多木によると空間はそこに存在し使用される物によって意味付けられ、そして、その意味付けされた場所こそ大切であるとして、建築において空間ではなく場所の重要性を強調した。つまり、空間を構成するものはその建築自身に反映するため、建築は使用することによってはじめて生きられた建築となる。使用者が介在しない建築は建築作品の数学的な情報空間になりえても、生きられた空間にはなりえない。専門誌における多くの写真は、その無人性や記録性・コード化された性格から、建物の竣工した時間のまま時が止まってしまったかのような性質を持ち合わせるといえ、そこから生きられた空間ということを感じることができないといえよう。

また、ル・コルビュジェは住宅とは住むための機械であるとし、また工業生産社会に適した量産住宅の到来を予言し、そこに住むことの状態の追求を提案したのに対し、アドルフ・ロースは、住宅は家族のためのドラマの上演のための舞台であり、そこで人間は生まれ、生活し、死んでゆくものとした。²ロースにとって住宅は住人とともに成長するものであり、内部のことはすべて住人にまかされるべきだった。つまり、コルビュジェにおいては空間重視の姿勢を示し、建築家の提供する空間に使用者が適応していくことを求めたのに対し、ロースは場所を重視し、建築は使用者と共に事後的に生成していくものであった。この2人の建築家の建築への接し方は専門誌・一般誌における写真に対応するといえるだろう。すなわち、専門誌においては空間構成を写し、建築家の提供する空間を伝えるというスタンスなのに対し、一般誌においては建築の空間だけでなく、その場における使用も重視し、そこでは建築は内部から作られているように感じることができる。また、磯達雄は、かつて建築はオブジェとして、すなわちひとつの形を持った見られる対象としてあったのだが、最近では見られるというよりも体験される建築が増えてきていると指摘している³。それは、建築家の視点からの建築から、使用者の体験によって空間を構成していく視点への変化の現れともとることができる。

さらに、人間による建築内における使用から生まれる空間の重要性について、オットー・ヴァーグナー (Otto Wagner) は、

建築芸術は、現在の人間の生活と必要に根ざさなければ、直接なもの、生気を与えるもの、新鮮にするものを欠くことになり、苦しい迷いの状態に沈み込んで、まさに芸術ではなくなるだろう。芸術は人間に仕えるために招来されるものであり、多くの人びとは芸術のために存在するの

ではないということを、芸術家はつねに見失ってはならない。(O. ヴァーグナー 1985 p. 97) ⁴

といい、建築が実際の生活に結びつくことによってその建築は意義あるものになるものとした。ヴァーグナーのこの原著は1895年に書かれているが当時書かれたこのことが、現在の一般誌と専門誌の比較において、一般化して現れてきているといえよう。一般誌における、その人と建築のつながりを撮影したような写真は今までの建築写真の原則を崩しながら、新たな建築像を読者に提示している。それは、専門誌における数学的な空間の美しさ重視の姿勢ではなく、建築と人とのつながりを重視し実際の使用者と共に成長していく建築の姿に他ならない。そのため、現在の建築においては使用者のさまざまな視点を軸とした建築の創出が重要になってきているのではないだろうか。

上記結果より、今日の一般誌の隆盛の事実を考え合わせた時、現代建築をとりまく情報環境の変容と考え得るものである。

-
- 1 多木浩二. (2001). 生きられた家 経験と象徴, 岩波現代文庫
 - 2 山本龍彦. (2002). 建築と建築写真の呪縛を超えて—表象文化としての建築の構造—. 関西学院大学. NACSIS-Electronic Library Service, vol. 1:37
また、ビアトリス・コロミーナも同様にロースとコルビュジェを比較し、ロースの作家性の排除とコルビュジェの作家性を比較している。ビアトリス・コロミーナ. (1996). マスメディアとしての近代建築 アドルフ・ロースとル・コルビュジェ. (松畑強 訳). 鹿島出版会
 - 3 磯達雄. (2006). 写真を撮りにくい建築が増えている?. (「建築写真」をめぐる 15 の問). 日経アーキテクチャ. 日経 BP 社:39
 - 4 オットー・ヴァーグナー. (1985). 近代建築, (樋口清・佐久間博 訳). 中央公論美術出版

参考文献

- ・細野透. (2007). 『建築雑誌』の幸運と不運. 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 122 : 38-41
- ・新宮岳. (2004). 「都市住宅に関する研究」
- ・吉田義男. (1995). 刊行のことば. 新建築社. 新建築 1995 年 12 月臨時増刊創刊 70 周年記念号 現代建築の軌跡 : 2
- ・坂本一成・奥山信一. (1986). 建築誌・住宅誌での写真における住宅 — 建築のイメージにかかわる枠組みの研究—. 日本建築学会. 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道) : 865-866
- ・坂本一成・西沢大良・高橋寛. (1987). 建築誌写真に表現される住宅—「建築としての住宅」のありかたに関する研究—. 日本建築学会. 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿) : 1071-1072
- ・新谷美和・貝島桃代. (2002). 建築雑誌に見る現代日本住宅における写真表現—写真と建築の関係—. 日本建築学会. 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸) : 579-580
- ・奥山信一・桜井春美・塩崎太伸. (2003). 建築写真に表現された室内構成—建築空間のイメージ形成にかかわる枠組の研究—. 日本建築学会. 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) : 281-282
- ・神原栄男・坂本一成・足立真・塚本由晴・小川次郎・寺内美紀子・三村大介. (1997). ル・コルビュジェ作品の発表写真における建築表現—『全作品集』にみられる写真の対象と構成—. 日本建築学会. 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) : 387-388
- ・岡河貢・足立真・坂本一成. (2003). 情報化された建築空間の構成に関する研究—ル・コルビュジェ全作品集の建築写真の連続性について—. 日本建築学会. 日本建築学会計画系論文集, 第 564 号:363-369
- ・岡河貢・足立真・坂本一成. (2006). ル・コルビュジェ全作品集における建築写真と図面・スケッチの構成—情報化された建築空間の構成に関する研究. 日本建築学会. 日本建築学会計画系論文集, 第 607 号:225-232
- ・岡河貢・足立真・坂本一成. (2006). ル・コルビュジェ全作品集における建築写真の対象と構成—情報化された建築空間の構成に関する研究—. 日本建築学会. 日本建築学会計画系論文集, 第 609 号 : 193-200
- ・三井圭司. (2005). 写真の歴史入門 第一部「誕生」新たな視覚のはじまり. 新潮社
- ・クエンティン・バジャック. (2003). 写真の歴史. (伊藤俊治 監修・遠藤ゆかり 訳). 創元社
- ・福屋粧子. (1998). フリーズフレーム—写真と建築の横断線—. INAX 出版. 10+1, 14 号 : 230-241
- ・五十嵐太郎. (1999). 情報・同時性・写真. 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 114 : 34-37
- ・福屋粧子. (1999). 建築写真の遠近法(パースペクティブ). 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 114 : 44-47

- ・大辻清司. (1986). 昔から垂直線、今も人影無し. 鹿島出版会. SD, 1986年6月号
- ・磯達夫. (2001). 転移する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで—. INAX 出版. 10+1, 23号: 77-82
- ・日経アーキテクチャ編集部. (2006). 「建築写真」をめぐる15の問い. 日経アーキテクチャ. 日経BP社: 8-41
- ・植田実. (1979). 編集者の立場から. 日本建築学会. 建築雑誌, vol. 94: 19-21
- ・福屋粧子. (1998). 建築はどのように伝達されるか—制度としての建築写真. 彰国社. 建築文化, 1998年2月号: 218-224
- ・山本龍彦. (2002). 建築と建築写真の呪縛を超えて—表象文化としての建築の構造—. 関西学院大学. NACSIS-Electronic Library Service, vol. 1: 35-44
- ・ビアトリス・コロミーナ. (1996). マスメディアとしての近代建築—アドルフ・ロースとル・コルビュジェ. (松畑強 訳). 鹿島出版会
- ・E・パノフスキー. (2003). 〈象徴形式〉としての遠近法. (木田元 監訳). 哲学書房
- ・柄谷行人. (1980). 内省と遡行. 講談社
- ・美術手帖編集部+谷川渥 監修・編集. (2002). 20世紀の美術と思想. 美術出版社
- ・高橋達夫. (1990). イタリア初期ルネサンス美術—15世紀の北方美術. 高階秀爾 (監修). 西洋美術誌, 美術出版社.
- ・ロラン・バルト. (1985). 明るい部屋—写真についての覚書. (花輪光 訳). みすず書房
- ・堀池秀人. (1997). 新建築—月評. 新建築社. 新建築, 1997年5月号
- ・堀池秀人. (1997). 新建築—月評. 新建築社. 新建築, 1997年7月号
- ・多木浩二. (2001). 生きられた家—経験と象徴. 岩波現代文庫
- ・山本龍彦. (2002). 建築と建築写真の呪縛を超えて—表象文化としての建築の構造—. 関西学院大学. NACSIS-Electronic Library Service, vol. 1: 37
- ・オットー・ヴァーグナー. (1985). 近代建築. (樋口清・佐久間博 訳). 中央公論美術出版
- ・坂本一成. (2000). 閉鎖から開放, そして解放へ—空間の配列による建築論. 新建築社. 新建築, 2000年11月号: 60-67
- ・坂本一成・多木浩二. (1996). 対話・建築の思考. 住まいの図書出版
- ・多木浩二. (2003). 写真論集成. 岩波書店
- ・五十嵐太郎. (2001). 終わりの建築/始まりの建築—ポスト・ラディカリズムの建築と言語. INAX 出版
- ・伊藤俊治. (2006). 空間の経験と創出. エクスナレッジ. 建築写真 Architectural Photography: 32-37
- ・横山優子. (2006). もうひとつのまなざしを探して. 建築写真 Architectural Photography: 62-63

- ・五十嵐太郎. (2006). 建築と写真がはじめて遭遇するとき. 建築写真 Architectural Photography : 134-137
- ・五十嵐太郎. (2001). メディアと建築—建築史の中の写真. INAX 出版. 10+1, 23 号 : 117-132
- ・浅井俊裕. (2001). 写真を語るということ. 水戸芸術館 ACM 劇場. WALK, NO. 42 : 64-68

謝辞

本研究を進めるにあたり、研究内容に対する助言や研究の方向性など様々な分野でご指導いただいた坂牛卓助教授に心より感謝します。思えば、建築意匠についての卒業論文を書いてみないかと先生に勧められたときには、戸惑いもあり悩みましたが、今になって思うところの卒業論文のテーマで進めることができよかったですと感じております。ありがとうございました。

そして、一年間チューターとして面倒を見てくださった高橋伸幸さんには大変お世話になりました。また、高橋さん以外にも M2 の芦田貴文さん、中尾友之さん、松永崇さん、M1 の片岡篤さん、山田匠さんには数々の助言をいただき、感謝しております。

また、この研究室で充実した学生生活を過ごせたのは一緒に頑張った、兼子晋君、武智靖博君、松田大作君、望月翔太君、鈴木俊祐君のおかげです。この研究室に入ってこの仲間に出会ったことは大きな財産になりました。

最後に、私が何不自由なく研究に勤しめたのも、影で支えてくれた家族のおかげです。ありがとうございました。

平成 19 年 3 月 平成 18 年度卒業生 平岩宏樹